
遊戯王 g × 転生者の介入録

ボルケーノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戲王gx 転生者の介入録

【Zコード】

N8089W

【作者名】

ボルケーノ

【あらすじ】

神の仕業で死んでしまった主人公如月魁史きさらぎ かいり

神は、代わりに別の世界に転生させてやるといい主人公が選んだのは「遊戯王GX」の世界だつた。

主人公は、積極的に原作に入りしどのような事になっていくのか？

第一話 転生そして新たなる人生（前書き）

始まりました。更新は不定期ですがガンバて行きたいです

第一話 転生そして新たなる人生

「ん、此処は何処だ・・・」

俺の名前は、おなまえ如月魁史かいつ大学が終わつていつも通りに行きつけのカードショップに行くはずだったんだかいつの間にか、辺りが真っ白な空間にいる。

腕を組んで、辺りを見わせていると向こうから白髪の爺さんが二つに向つてきてスライディング土下座をしてきた

「どうも、すいませんでした！――――――――――――――――――――

「な、なんだ・・・・あんたは？」

俺は、いきなりの事態に混乱しながらも土下座をしてくる爺さんに聞いた。

「私は、貴方の世界で言つ神といふ者じや」

そして、爺さん・・・・いや、一応神と言つておこひ。神が、此処が何処か、なぜ俺が此処にいるかを説明してくれた。

「此処は天界の爺さんの空間で、爺さんが暇つぶしに紙飛行機を折つていて間違つて俺の人生が書いてある紙を折り、他のゴミと一緒に捨てたといふことか？」

俺は、ひたすら土下座をしている神に聞き、神は額についた汗をつきながら

「ひ、うむ・・・ちやんと分けてはいたんじやが、たまたま混じつていたよつで『氣づいた時には焼却所で・・・・』

神は、言こと辛そうに答えた。

「はあ～まあ、もう起きた事だから取り返しないけどや。これから、俺はどうなるんだ? 死んだってことは、元の世界には戻れないんだろっ!」

俺は、ため息を吐きながら起きてしまった事を受け止め神に聞いた。

「そ、それについては、特例として違う世界に転生という処置が取られることになったんじや。わしに出来る事はなんでもするから、言つておくれ!」

俺は、神のその言葉を聞き興奮しながら聞いた。

「違う世界つて、漫画やゲームの世界でもいいのかー?」

「ひ、うむ。 その程度なら訳はない、何処か行きたい世界にでもあるのかの?」

俺は、生前はゲームやアニメが大好きだったため実際にに行ってみたないと何度も考へた事があった。

「せうだなあ・・・(ゲームの世界か、面白いかもしれないけど。やつぱり、言つてみたい世界は、『あの世界』だよな!-)」

俺は、色々と考えようやく転生先に選んだ世界は・・・・・

「決めたぞ、俺は遊戯王の世界に行つてみたい！…！」

そう、生前は何種類ものカードゲームをやっていたが、その中でも遊戯王は10年以上やっていたカードゲームだった、アニメも全シリーズ見たし目の前で自分が好きなモンスターが実体化するなんて、ここまで興奮する世界はない。

「遊戯王の世界か、うむ。大丈夫じゃよ、しかし、この世界は何種類かに分かれているが何処の行きたいのじや？」

神の、その言葉に俺の考えはすでに決まっていた。

「俺が、行きたい遊戯王の世界はGXの世界だ！！」

そして、ここから俺の新たな人生が始まった。

第2話 ＶＳクロノス 嘘け、龍の息吹（前書き）

第一話投稿

第2話 √Sクロノス 嘘け、龍の息吹

「さて、此処が童実野町か。うはあ～マジで、アニメ通りだ、感激だ！！！」

神と話していた空間から、出た俺は童実野町の時計台の下に立っていた。

「此処が、初代遊戯王のバトルシティーが始まった場所か。まさか、俺が立つことが出来る何で夢にも思わなかつたな。 そういえば、俺、デッキは持つているのか？」

転生直前まで、鞄の中には多くのデッキが入っていたが神と話している時にはその鞄がなかつた事に気が付き身についているものを確認してみると

「お、これつて転生前から使つていた鞄だ。中身はつと・・・良かった一軍や他のデッキも全部入つてるよ、後はこれは、デュエルアカデミアの受験票か？」

見てみると、番号は1111番か確か、十代は1110番だつたかな？

俺は、辺りも見回してみると時計の時間に気がついた。

「やべ！！入学試験に遅れちまつ、此処まで来て入学できないなんて洒落にならない。」

俺は、走つて海馬ドームに向つた。

そして、ドーム内に入るとあゅうビ十代がクロノスの「古代の機械

「巨人」に攻撃する所だった。

「ガツチヤツ！楽しいデュエルだつたぜ、先生！…」

「そんな、ワタシがこんなドロップアウトボーイに負けるナンテ」

クロノスが、すじく落ち込んでいた。まあ、バカにしていた奴に負けるのはくやしいけどあんなにかと、考えていると

「次、111番！デュエル場に！」

そして、俺の番になつたので下に降りる最中に十代とすれ違ひ様に

「頑張れよ！…」

「おう！…ありがとよ！…」

俺は、気を引き締めてデュエル場に立つた。

「では、試験を開始する。デュエーチョット、待つの～ネ」ク、クロノス教諭どうしましたか？」

「その子の、相手はワタシ～がするの～ネ（あんな、負け方をして、学園に帰つた～らしい笑い者なの～ネ。この子には悪いですが名前挽回させてもらう～ノ）」

そして、試験官とクロノスが交換した様子を見ていた魁吏は

「（絶対に、俺を名前挽回の道具に使うつもりだらうなあ～なら、

逆にボロボロにしてやるぜ……」

魁吏は、明らかに悪い顔をしながらクロノスを見た。

「では、試験を始める～ノ～！」

「「テュエル！～！」

クロノス LP 4000

魁吏 LP 4000

「先攻は、譲るの～ネ」

「なら、俺のターン。ドロー～！」

俺は、引いたカードと手札を見て

「よし、これなら。俺は、フィールド魔法『龍の渓谷』を発動する
～！」

場 龍の渓谷

「このカードは、1ターンに一度手札を一枚捨てる事で『テッキから
レベル4以下のドラグニティと付いたモンスターを一枚手札に加え
るか、ドラゴン族モンスターを一枚墓地に送るが出来る！～俺は、
ドラグニティ・ブラックスピアを墓地に送り『テッキから、ドラグニ
ティ・ファランクスを墓地に送る！～そして、手札から霧の谷のフ
アルコンを攻撃表示で召喚してターンエンド～！

霧の谷のファルコン ATK2000

魁吏

モンスター 霧の谷のファルコン

「私のターン、ドロー。ワタシは伏せカードを2枚セットシテ、魔法カード大嵐を発動スルーノ。そして、破壊されたカードは黄金の邪神像、このカードは破壊されたときに、邪神像トークンを特殊召喚する～ノ」

場 無し

クロノス

モンスター 邪神像トークン×2

「ち、やつぱり原作通りか。で、次に出てくるのは・・・」

「ワタシは一体の邪神像トークンを生贊～にいでよ、古代の機械巨人を召喚する～ノ」

クロノス

モンスター 古代の機械巨人 ATK3000

「そして、バトルフェイズ。古代の機械巨人で霧の谷のファルコンを攻撃！！」

魁吏 LP4000 3000

「ワタシはさらに、一枚セットして、エンドな～ネ（念のために聖なるバリア ミラーフォースを伏せておくの～ネ）」

クロノス

モンスター 古代の機械巨人

伏せカード 一枚

「俺のターン！…ドローー（まさか、ここまで原作通りとは思わなかつたぜ。しかし、会場の奴らもうダメだつて顔で俺の事見やがつて、でもここからが俺の見せ場だぜ！…）俺は、手札から魔法カード手札抹殺を発動！！互いのプレイヤーは手札を全て捨て、捨てた枚数分ドローする。俺は、四枚ドローー…」

「フン、何をする～と思え～ばただの、手札交換です～か。所詮は、ドロップアウトボーカーのーネ」

クロノスは、鼻で笑っていたが

「それは、これから起きる事を見てからいいな…！俺は、ドラグ一ティ・アキュリスを召喚」

魁吏

モンスター ドラグ一ティ・アキュリス ATK1000

「このカード召喚された時ドラグ一ティと付いたモンスターを特殊召喚しこのカードを装備する。ドラグ一ティ・レギオンを特殊召喚！！そして、レギオンの効果発動、自分フィールドの魔法・罠ゾーンにあるドラグ一ティを墓地に送る事で相手フィールドに表側に存在するカードを破壊する、俺は古代の機械巨人を選択…！」

魁吏

ドラグ一ティ・レギオン（ドラグ一ティ・アキュリス装備）

レギオンから発射されたアキュリスがクロノスの古代の機械巨人を貫いた。

「アンマニーヤ、ワタシの古代の機械巨人をが～！？！？！」

しかし、クロノスの不幸はまだ続く

「そして、墓地に送られたアキュリスのモンスター効果発動！！このカードが装備状態で墓地に送られた時フィールドに存在するカードを一枚破壊する、俺は先生の伏せカードを破壊！！」

アキュリスが、クロノスの伏せカードを貫き破壊した。

「やはり、攻撃反応型の罠か。俺は、魔法カード一重召喚を発動！俺は、これでもう一度、通常召喚ができる。俺は、もう一度ドラグニティ・レギオンを召喚、そして効果発動、このカードが召喚に成功した時墓地に存在するドラグニティを装備できる、俺は、墓地よりドラグニティ・ファランクスを装備する！そして、装備状態のファランクスの効果発動、装備されているこのカードを特殊召喚する事が出来る。チューナーモンスター ドラグニティ・ファランクスを特殊召喚！！」

「…………チューナー！？！？！？」

会場から、声沸き上がった

「何なの～ネ、チューナーとは？」

クロノスはクロノスで、始めて見るモンスターに混乱している。

「見て、いれば分かるぜ、行くぜ！俺は、レベル3のレギオン一体にレベル2のファランクスをチューニング！…」
「いや、ドラゴンの咆哮を轟かせ墓地に眠りし同胞を力に変えよ！…シンクロ召喚 ドラグニティナイト・バルーチャ！！」

魁吏 ドラグニティナイト・バルーチャ ATK 2000

「シンクロ召喚とはなんなの？？」

「シンクロ召喚とは、チューナーとチューナー以外のモンスターを素材に合計レベルと同じモンスターを融合『テック』から特殊召喚する召喚方法だ！！」

「すげーな、あいつのモンスター…！闘つてみて…」

「何か、すごいっす！！」

観客席で、十代や翔が騒いでいた。

「しかし、レベル8にしてはたったの2000しかないなんつて
たいしたことないの～ね」

「俺は、まだバルーチャの効果を使っていない！！効果発動、このカードが召喚に成功した時に自分の墓地に存在する「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスターを任意の数だけ選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。このカードの攻撃力は、このカードに装備された「ドラグニティ」と名のついたカードの枚数×300ポイントアップする！！俺の墓地には五枚のド

ラグニティがいるので、全て装備する、よって攻撃力は・・・

魁吏

モンスター ドラグニティナイト・バルーチャ ATK2000

3500

魔法・罠

ドラグニティ・ファランクス×2、ドラグニティ・アキュリス、ドラグニティ・ブラックスピア、ドラグニティ・プランディストック、

「こ、攻撃力が・・・3500に。し、しかし攻撃されたとしても後500は残るのーネ」

クロノスは、ビビりながらも言った。

「それは、どうかな。」

魁吏は、笑いながら言った

「ど、どひ言ひことなのーネ！－」

「バルーチャに装備されている、ドラグニティ・プランディストックの効果は装備されているモンスターに一回の攻撃を与える能力を持つている、よってバルーチャは3500の一回攻撃が可能！！バルトだ！！ドラグニティナイト・バルーチャで先生に向つてダイレクトアタック！－」

バルーチャから、放たれた咆哮がクロノスを襲つた

クロノス LP4000 - 3000

「アーティスト」

こうして、入学試験が終わった。

第2話 √Sクロノス 嘘け、龍の息吹（後書き）

「ほんにちは、主人公の如月 魁吏です。」

「ほんにちは、作者のホッシーです。」

「おい、どじめがバルーチヤつてなんなんだ。あれは」

「あれは、実際にやられて事があるしゃつた事があったので、最初にはちよづびいいかな思つたんだよね」

「いや、他にも色々とどじめの探し方あつただひ。ドラクニティな
りアラヅリとか」

「あれも、一応考えてはいたんですけど・・・ありきたりなので没に
しました。まあ、ドラグニティは以上にあれは出しやすいんだけど
ね」

「はあ、まあいいか。で、次はどんな話なんだ？」

「原作通りに進む予定なので次は、自称エリートとのございです
かね。では、」

『ばいばい』

主人公設定（前書き）

今回は、主人公　如月魁吏についての書きます

主人公設定

名前 如月 魁吏

容姿

ドットハックGUのハセヲの髪を黒くし、後ろ髪を長くしたような感じになっている。

年齢

転生前 23歳 転生後 15歳

神のせいで死んでしまいその後、GXの世界へと転生した。デッキは複数持つており状況によつてデッキを変える。普段はやさしいがキレるとかなり危険だ。

使用デッキ

1軍 ???

制裁デュエルで登場予定

2軍 獣デッキ（エクシーズ・シンクロ混合型）

主に「神獣王バルバロス」と「森の番人 グリーン・バブーン」の2体で殴るデッキだが場合によつてはエクシーズやシンクロする。

3軍 レスキュー・ラビットデッキ

名前通りレスキュー・ラビットがメイン。エースモンスターは「銀河眼の光子竜」

4軍 ドラグニティテック

純正ドラグニティテックだが、「S.i.no スターダスト・ドラゴン」が入っており「トライデント・ドラギオン」を出しやすくなっている。

その他にも色々とアーティックを持っているが、主に使う2軍から4軍

主人公設定（後書き）

以上です。

第三話 入学そして接觸（前書き）

今回はテュエルはなしです。

第三話 入学そして接觸

、俺はデュエルアカデミアに向う船にいる。制服の色は赤、つまりレッド寮だ。クロノスに3500の一回攻撃で倒したのに、筆記テストでは十代よりも下だったらしい、しかし・・・

「ドラグニティーは、まだ完璧に使いこなせてないなあ～まあ、クロノス相手に『あのデツキ』を使いたくなかったし、仕方ないか。」

（作者は、小説を書くまでドラグニティーを使った事がなく実際に作成し現在練習中）

「しかし、バルーチヤが出るとは思わなかつた・・・レヴァティンが手札に来ていたら、トライティントの三回攻撃をしていただろうけど、勝てたからいいか。」

魁吏が、クロノスとの戦いを振り返つていると、後ろから

「なあ、お前シンクロつていうカードを使つた奴だろ！？俺の名前は、遊城 十代っていうんだ、よろしくな！」

「僕は、丸藤翔っス。よろしく」

「俺は、三沢大地だ。よろしく。」

GXの主要キャラ達が話しかけてきた。

「ああ、俺は如月魁吏。」
「へじひみ、よろしく」

魁吏は、十代達と握手し島に着くまで話をし、十代達と一緒にレッド寮の前まで来た。

「…………」まどかは、思わなかつた

アニメで、ボロいのは知つてゐるが此処までとは思わつていなかつた。

「でも、なかなか良いんじやないか？俺は、好きだぜ。」

十代は、生き生きと自分の部屋に向つた。

「まあ、十代達は二人だけ俺は、一人らしいし良いかな？」

そして、魁吏も自分の部屋に向い、デッキの調節をしているとドンドン……とノック？？する音がし、開けてみると

「よひ、魁吏ー…そくだけどデュエルやひづ…」

十代が部屋に遊びに来た、後ろを見ると苦笑している翔がいた。

「良いけど、何処でやるんだ？」

「学校内にデュエル場があるらしいから、そこでやるつむー…」

「分かつた、少し待つてくれデッキを持つてくるから（デュエル場か、となると万丈目との接触かな？）」

そして、十代達とデュエル場に行つたが原作通り、万丈目達と一緒に

着があつた・・・・が、なぜか。

「おい、貴様！！クロノス教諭を倒したからといい気になつているなよー！」

怒りの矛先が俺に向けられていた。さつきから、話しかけられても無視を決め込んだからだと思つけど、

「はあ～（俺、最初の方の万丈目つて嫌いなんだよなあ～エリートぶつて）」

「貴様、俺様を見てため息吐きやがつて、上がり、貴様をみじめに負かせてやる！…」

万丈目は、デュエルディスクを腕に付け挑発してきた、そこに

「貴方達、何をしているの。」

入口から、GXのヒロイン天上院 明日香が現れた。良く見ると、後ろには原作には居なかつた青髪ロングの女の子がいた。容姿は、出る所は出でおり引っ込む所は引っ込んでいてかなりの美人だ。（分かりやすく言つと、シャツフルのネリネの青髪と考えてください）

「天上院君に、天原君。この新入生にアカデミアの厳しさを教えてあげようとしていた所さ。」

万丈目が、魁吏達を指さしたが

「そ、そろそろ、歓迎会の時間なのでやめておいた方がいいと思います。」

天原といつ女の子がびくびくしながらも、万丈田に言った。

「ちっ、行くぞ！お前達！」

万丈田は取り巻きを連れて、デュエル場を出て行った後

「貴方達、彼の挑発に乗らない方がいいわよ。」

「そ、そうです。万丈田さんは怖いですし、デュエルの腕もかなり高いんです。」

魁吏と十代は、二人の言葉に

「デュエル（喧嘩）を売つてき買わないなんて、デュエルリストじゃないぜー！」

「そうさ、それに強い奴と戦えるんだ。そっちの方がずっと楽しみだぜーー！」

魁吏と十代は、拳を口上とぶつけて明日香達に叫んだ。

「所で、あなたよね。入学試験でシンクロ召喚っていうのを使つたのは。」

明日香は、魁吏に聞いてきた。

「知つているといふ」とは、見ていたのか？」

「私だけじゃないわよ。」うちの天原さんやさつきの万丈田君達も

見ていたもの」

「ふ～ん（確かに、原作でもいたな。後、カイザーもいたかな？）」「

「で、何か用なのか？」

「いえ、今後色々と楽しみが増えそうと思つてね。そつちの彼と同じように」

明日香は、十代の方を見て笑つた。

「まあ、この学校にいるんだ。いづれは戦う事になるだらつからその時は、よろしく。俺は、如月魁吏」

「私の、名前は天上院明日香。じょうげんひよりか、よろしく」

そして、魁吏はもう一人の女の子に近づき

「よろしくな。」

「は、はい。私の名前は、天原 美里 あまはらみり、よろしくお願ひします・・・」

やはり、少しひびくしている。

「大丈夫だよ。何もしないし、これから友達になるんだからびくびくするなよ。」

魁吏は笑いながら言いその言葉に、天原は顔を上げ魁吏の顔を見て

「これって・・・・・」この時代でシンクロなんて使つたらマジで、無双じゃないか・・・・（これは、ひどいな。強欲が使えて、天使が使ってこれは、いじるのが楽しみになつてきた）

顔を、赤くしながら握手をした。その後、天原たちと別れ、この時代の制限・禁止リストを確認しながらデッキを調節していたら

としているところ、PDAからメールの着信音が聞こえてきた。ちなみに、曲は真恋姫無双／萌将軍／『深紅の呂旗』だ。これを、聞いた時はしごれた。

「何々、『ドロップアウトボーイ、午前0時に決闘場で待つ』ている。互いのベストカードを賭けたアンティルールでデュエルだ。勇気があるな。はははははははっは！－！－！』だと、なら鼻つ柱を叩き折りに行くかな。」

外に、行くと十代達が見え一緒にデュエル場に行つた。

第三話 入学そして接触（後書き）

次回は、ついに万城目とのデュエルです。お楽しみ

第四話　VS万城目 壊れた機械の力（前書き）

では、万城目とのデュエルです。

第四話 √S万城目 壊れた機械の力

「よく来たな、ドロップアウトボーイ。逃げなかつた事は褒めてやるつだが、来た事を後か「うるさい、わざわざ来てやつたんだ。御託はいいから早くしな。」き、貴様！一度ならず一度までも俺を馬鹿にするとは呪きのめす……」

魁吏の一言で、万丈目がキレ、デュエルが始まった。

「魁吏、頑張れよーー！」

「応援してますよーー！」

十代達が、少し離れた所から応援していると、

「やつぱり、こんな事になつていたわね。」

十代達が、後ろを見ると明日香と天原がいた。

「でも、明日香さん。デュエルは始まつたばかりらしいですよ。」

十代が明日香達に近づき

「お前ら、何でこんな時間に此処にいるんだ？万丈目から何か来たのか？」

十代の質問に天原が答えた。

「い、いえ。あの万丈目さんが、大人しく引き下がるわけがないつ

て明日香さんが言うので見に来てみたら・・・まさか、本当にこんな事になっているなんて。」

天原が魁吏の方を見ながら言うと

「まあ、始まつたものは仕方ないから見てよつぜ！今度は、どんなシンクロモンスターが出るか楽しみだぜ！－！」

十代が興奮しながら言い、デュエルが始まつた。

「行くぞ、万丈目！－！」

「万丈目『せん』だ！－！」

「『デュエル！－！』

魁吏 LP 4 000

万丈目 LP 4 000

「先攻はいだぐー！ドロー！－！」

万丈目は、自分の手札を確認し

「俺は、リボーン・ゾンビを召喚！さらに、伏せカードを2枚セツトしターンエンド！－！（俺が、伏せたのは通常・特殊召喚したモンスターを破壊し除外する『奈落の落とし穴』あいつのシンクロモンスターは特殊召喚だからな。した瞬間、除外してくれる！－！）」

万丈目

モンスター

リボーン・ゾンビ

AKT1000

伏せカード

2枚

「俺のターン、ドロー！…」

魁吏は、ドローしたカードと手札を見ると

「（えつ！！）この手札って）俺は、魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動！！このカードは手札から、モンスターを捨てデッキからレベル1のモンスターを特殊召喚する。来い、レベルスティーラ」

魁吏

モンスター レベルスティーラ A KT600

「さらに、魔法カード愚かな埋葬を発動、デッキからモンスターを一枚墓地に送る。そして、魔法カードサイクロンを発動。万丈目、左のカードを破壊する…！」

「ちつ…」

サイクロンは、『奈落の落とし穴』を破壊した。

「（奈落の落とし穴が破壊されたが、もう一枚は相手が攻撃してきたら攻撃表示モンスターをすべて破壊する『聖なるバリア／ミラーフォース』！！攻撃してきた瞬間にお前は、終わりだ！！）」

「（やはり、原作と違っているか……となると、もう一枚は攻撃

反応型の罠かな？でも、今から、出すモンスターには意味なし！
俺は、チューナーモンスター、スクラップ・ビーストを攻撃表示で
召喚！！」

魁吏

モンスター

レベルスティーラ A K T 600

スクラップ・ビースト A K T 1600

「来たか、チューナーモンスター！…」

魁吏が新たなチューナーモンスターを召喚を見て、十代達は

「お、来たぜ！チューナーモンスター、今度はどんな、シンクロモンスターを見せてくれるのかな！？」

「でも、入学試験で使っていた『ドラグニティー』じゃないんですね。
今回はまるで」

翔のその言葉に明日香は

「ええ、チューナーモンスター、だからシンクロはするだろうけど…
・・何かあのモンスターは機械っぽいモンスターね。」

「（あの、モンスター達で今度はいつたいどんなモンスターが…
）」

「俺は、最後に魔法カード死者蘇生を発動！！俺の場に甦れ、スクラップ・ゴーレム！…」

魁吏

モンスター

1レベルスティーラ

4スクラップ・ビースト

5スクラップ・ゴーレム A K T 2 1 0 0

「俺は、レベル5のスクラップ・ゴーレムにレベル4のスクラップ・ビーストをチューニング！！今ここに、破棄された龍がその力を振るうために起動する！シンクロ召喚、スクラップ・ツイン・ドラゴン！！」

魁吏

モンスター

1レベルスティーラ

9スクラップ・ツイン・ドラゴン A K T 3 0 0 0

魁吏の場に頭を二つある機械のような龍が召喚されたモンスターを見て十代達は

「つおおおおお……かっけ～」

「何すか、あのモンスターは」

「あれが、彼の新たなシンクロモンスター……」

「（すいこ、あんなモンスターを一ターンで召喚するなんて）」

万丈目は、スクラップ・ツイン・ドラゴンを見て、最初は驚いていたが

「（いくら、攻撃力が高かろうと破壊されてしまえばこいつの物だ！…）さあ、どうした！！攻撃してきてみろ…！」

万丈目は、魁吏の事を挑発してきたが魁吏は落ち着いており

「（あの様子だと、やはりあの伏せカードは攻撃反応型か。しかし、今となつたら意味がないけれどな…）俺は、スクラップ・ツイン・ドラゴンの効果発動！！このカードは1ターンに一度、俺の場のカードと相手のカードを一枚選択する、俺のカードは破壊され、相手の選択したカードは手札に戻る…俺は、自分の場のレベルスタイルとお前の場のリボーン・ゾンビともう一枚の伏せカード選択する…！」

「な、なんだと…！…それじゃあ…！」

魁吏

万丈目

モンスター

伏せカード 0

モンスター スクラップ・ツイン・ドラゴン

「さらに、墓地に存在する一枚のレベルスタイルの効果を発動、俺の場にいるレベル5以上のモンスターのレベルを1下げる事で特殊召喚できる！俺は、スクラップ・ツイン・ドラゴンのレベルを2下げ、特殊召喚…！」

魁吏

モンスター

スクラップ・ツイン・ドラゴン

レベルステイーラ 二枚

「すげー、一気に三体並んだ！！」

十代と翔は、召喚されたモンスターに興奮し、明日香は魁吏の無駄の無いプレイinguを見て

「相手の場のカードを処理し、自分の場は強化・・・なんて人なの」

そこに、天原はある事に気がついた。

「あの、気づいたんですが、あのレベルスティーラというモンスターって自分の場のレベル5以上のモンスターのレベルを1下げて特殊召喚するんですね？」

「そうね、それがどうかしたの？」

明日香は、まだ気づいていなく十代と翔に関しては全く分かつていなかつた

「つまり、あのスクラップ・ツイン・ドラゴンは効果で自分のカードも選択しないといけないんですが・・・あの、モンスターが墓地にあり限り何度もつかえるのでは・・・」

天原の、その言葉を聞いて皆は、

「あつ

「さて、とどめと行きますか？レベルステイーラー2体で万丈目を攻

擊！

万丈目 LP4000 2800

「ぐつーき、貴様！」

「これで、とどめだ！！スクラップ・ツイン・ドラゴンの攻撃！！
ブラスト・ツイン・インパクト！」

万丈目 LP2800 0

「そんな、俺が、エリートの俺がこんなドロップアウトボーイなんぞに負けるなんて・・・」

「これからは、人を馬鹿にするのはやめるんだな。万丈目。」

「まずいです、警備の人気がこっちに向ってきます！」

天原のその言葉に俺達は

「マジで！..逃げるぞ、魁吏！」

「ああーーー！」

魁吏がデュエル場から降り、走りだしたら後ろから

「如月 魁吏！覚えておけ、俺に『えた』この屈辱は忘れんぞーーー！」

「で、どうだつたかしら？ブルーの先例は。」

明日香は、腕を組みながら魁吏に聞いた

「大したことは無かつたな。あんな満身野郎に負けるほどひ弱でもないしな、それに俺も本気を出していなかつたし。」

その言葉を聞き明日香や十代達は驚いた。

「あの『テッキ』は、本氣じゃなかつたの…？」

「ああ、あれはお気に入りの一つだけど一軍じゃないな。この『テッキ』は、せいぜい五軍位の『テッキ』かな。」

「な…！（あの力で五軍だなんて、その上は一体なんなの…）」

「さてと、俺は既にから帰らせてもらひつぜ。また明日な、行くぜ、十代に翔。」

「お、おこ。待ってくれよ、魁吏。」

「ああ、僕を置いていかないで欲しつつ…」

じつして、万丈田との戦いは終わった。

第四話 ＶＳ万城目 壊れた機械の力（後書き）

「おー、作者……」

な、なんだ、魁吏

「また、ワンキルで勝つのはどういう事だ。」

え~と、すみませんでした~どうしても、ライフが4000だとワンキルになってしまいやす~」一回連続でワンキルという事になってしましました。

「すみませんでしたじゃね~よ。少しは、内容を濃くしやがーー!」の
駄作者ー!」

次回こそは、しっかりとしたデュエル後景を書きたいと思~ます。
お楽しみにしていてください。

「全く、ちゃんとしろよな。」

第五話 ＶＳ天原 侍対獣（前書き）

すみません。一つ投稿し忘れました・・・

翔ののぞき事件編です。

第五話 ＶＳ天原 侍対獣

あれから、数日が経つたが……なぜか翔の奴が異常に気持ち悪かった

：

「おい、十代。翔の奴どうかしたのか？体育が終わって辺りから、変に笑つて氣味が悪いんだが」

「さあ、知らないな、聞いてみた方が早いかな。」

そして、魁吏と十代は翔に近づくと、

「うふふふ。あ、魁吏君にアニキ～いや～春つて良いっすね～アニ達にも早く、春が来ると良いですね～」

と、やはり気味が悪い笑顔で笑つていた…………

「これは、入れて……こつちはどうするかな？」

その夜、魁吏がデッキ調整していくと ドンドン！！

「魁吏、大変だ！翔が誘拐された！」 十代が、魁吏の部屋に飛び込んできた

「何があった……」

魁吏は、突然の事で余り頭が回らなかつたが喋ることが出来た

「さつき、俺のPDAに変なメールが来て、翔を預かつた。返して

ほしければ、女子寮まで来いって来たんだ！」

「（ああ、今田せりのイベントの田だつたな。めんじくせこが行つてゐるとかねか・・・）じゃあない、行くか十代。」

「おう、翔を早く助けに行け！」

十代が、ドアをから飛び出していつたがすぐに戻ってきた

「そういえば、俺、女子寮が何処にあるか知らなかつたけ」

「確認してから、飛んで行けよ……！」

そうして、魁吏の案内で女子寮まで行き、そこで待っていたのは、原作通りに明日香、ともえ、ジゅンコがいて、翔を簣巻きにして立っていた。それとなぜか天原も一緒に立っていた

「翔、お前何をやつたんだ。今なら、罪は軽いぞ？」

魁吏は、翔を見る途端真剣なまなざしで言つたら

「違うッす。僕は、何もやつていないつす！ー」

翔は、涙目になりながら魁吏に言うが、

「何よ、覗きのくせにしきぱりくれるつもりなの……」

たら
ももえが、翔の方を向き言いその言葉を聞いた魁吏は少しだけ引い

「ああ、魁吏君引かないでほしごつす……僕は、手紙に此処に来てほしごつて書いたつす。」

「手紙？」

魁吏は、翔のポケットから手紙を取り出してみたが……。
「おい、翔。これ、字が汚うざるだろ……なんで、こんなので来る気になつたかな。」

「せうよ、私の字はこんなに汚くはないわ。」

明日香も、手紙の字を見て少しだけ怒つている

「なあ、なら事件は解決つてことで翔は連れ帰つてもいいだろ?」

十代は、明日香達に近寄つて立つが

「（）まで来て、ただで帰るなんてもつたいなくない?十代、魁吏、貴方達ぢやりでもいいからテュエルしない?」

「お、面白こじやん……魁吏、俺に行かせてくれよ、頼む……」

「まあ、いいか。じゃあ、俺はけんが「魁吏さん、だつたら私とテュエルしませんか?」え?」

美里が、おどおどしながら立つてきた

「あい、ねずうじこ。美里が自分からテュエルを申し込むなんて、しかも男子に。」

美里は、性格上自分から申し込みなどはしない限りいが

「だ、ダメでしょ？」「

『さあ、ひるがい』しながり呪つめられたので

「う、こ、こ、せ、やうか。（）」こんな見つめられて、断れるか・・・」

そして、明日香とのデュエルは原作通りにサンダー・ジャイアントで止めをさし俺達の番となつた。

「わ、じゃあ。俺達もさあと始めるか？」

「は、はー。少しだけ待ってください。」

それすると、手首に巻いてあつたひもを解き直い髪をまとめ始めた。

「魁吏、少しひりくらぬかもしれないけど頑張りなよ。」

後ろにいた明日香が不意にこんな事を魁吏に言つた

「それって、どこへと「では、魁吏殿一尋常に勝負を開始いたしまじょひーー」な、何・・・」

美里が、髪をまとめたら今までのおどおどとした態度から凜々しこう言葉が合ひ感じになつていた。

「え～明日香さん、出来れば説明をしていただけたいんですけど・・・

「

「美里はね、『テコノル』となると髪をまとめる癖があるみたいで・・・
・髪をまとめるど、まさに武士といつ言葉が合ひの風になってしまつ
の。彼女の『テツキ』がそつだからかもしれないけど」

「魁吏殿、お話をこの辺で終わりにして勝負です・・・」

「お、おひ。では、あらためて・・・」

「「テコノル！！」」

魁吏 LP 4000

天原 LP 4000

「行きます、魁吏殿！私のターン、ドロー！」

「私は、六武衆キザンを攻撃表示で召喚！さらに、一枚伏せてター
ンヒンドー！」

天原場

モンスター 六武衆キザン A K T 1 8 0 0

伏せカーデ一枚

手札 3 枚

天原のモンスターを見た十代達は

「へえ～六武衆『テツキ』か、おもしろい『テツキ』だな。」

「そうね、でも場の支配力はかなり高いデッキよ。」

「六武衆は展開中はすさまじいですから」

「俺のターンードロー！（六武衆か、並ばれると厄介だからな。）
俺は、おとぼけオポッサムを召喚！」

魁吏 場

モンスター おとぼけオポッサム A.K.T 600

「攻撃力600を攻撃表示で召喚？何を、考えているの？」

「見てればわかるさ。俺は、さらにおとぼけオポッサムの効果を発動。このカードの召喚時、相手の場にこのカードよりも攻撃力が高いモンスターが存在する場合、このカードは破壊される。天原の場には攻撃力1800のキザンがいるため、おとぼけオポッサムを破壊する！！」

魁吏 場

モンスター 0

「じ、自分のモンスターを破壊した！？どうして・・・」

「その瞬間、手札からモンスター効果発動！！このカードは、自分の獣族モンスターが破壊される事でライフを1000支払う事で手札又は墓地から特殊召喚する事が出来る、来い、我がデッキの番人！！森の番人 グリーン・バブーン！！」

魁吏

L P 4 0 0 0 3 0 0 0

場

モンスター 森の番人グリーン・バブーン A K T 2 6 0 0

「すげー1ターン目から攻撃力2600の上級モンスターを召喚したぜー！」

「彼、さすがね。2体のモンスター効果をうまく組み合わせているわ。全く、無駄がないわ・・・（彼、シンクロ召喚だけじゃなくモンスターの相性も理解している。）」

「1ターン目から上級モンスターとはやりますね、魁吏殿。（しかし、私の伏せカードの一枚は収縮。攻撃してきたか返り討ちです。）」

「俺は、永続魔法、強者の苦痛を2枚発動する。この魔法カードは相手モンスターのレベルかける100下がる。よつてザンジの攻撃力は」

六武衆ザンジ A K T 1 8 0 0 1 4 0 0 1 0 0 0

「そ、そんな・・・（これでは、半減させても迎撃出来ない）」

「それでは、バトルフェイズ！－グリーンバブーンで六武衆キザンを攻撃、怒りの鉄槌！－」

天原 L P 4 0 0 0 2 4 0 0

「俺は、さらに伏せカードを一枚セットし、ターンエンド…！」

魁吏 場

モンスター 森の番人 グリーンバブーン A K T 2600
伏せカード一枚 強者の苦痛一枚

手札1枚

「私のターン、ドロー！…私は、魔法カード二重召喚発動。このカードの効果でこのターン一度通常召喚できる、私は六武衆力モンとイロウを召喚！」

天原 場

モンスター 六武衆 カモン A K T 1500 900
六武衆 イロウ A K T 1700 900

「私は、カモンの効果発動、フィールドのある表側の魔法又は罠を1枚破壊できる。私は、強者の苦痛を1枚破壊し、これによつて攻撃力が」

六武衆	カモン	A K T 900	1200
六武衆	イロウ	A K T 900	1300

「攻撃力は、少しだけ元に戻つたか…。（このデッキには召喚反応系の罠が入っていないから召喚時何もできないか…）」

「私は、このままバトルフェイズに移行しイロウで森の番人 グリーンバブーンを攻撃！！」

「くっ、イロウで攻撃という事は手札に…」

「ええ、その通りです。だから、速効魔法 月の書を発動しグリーン・バブーンを裏向きにします。そして、裏向きになつたグリーン・バブーンをイロウで攻撃！沈黙の剣！！」

イロウがセット状態のグリーンバブーンを刀で突き刺し破壊した

「カモンは効果を使ったターンは攻撃はできません。ターンエンドです」

天原 場	
モンスター	六武衆イロウ
	A K T 1 3 0 0
六武衆カモン	A K T 1 2 0 0
伏せカード2枚	
手札0	

「俺のターン、ドロー！俺は、手札からおとほけオポッサムを召還し、効果で破壊。LPを1000支払い、もう一度グリーン・バブーンを墓地から復活させる。」

魁吏

LP 3000 2000

場
モンスター グリーン・バブーン A K T 2 6 0 0

「そして、グリーン・バブーンで六武衆カモンを攻撃！怒りのコンバット！」

「私は、伏せカードをオープン！攻撃の無力化。攻撃を無効にして、

バトルフェイズを終了させる。」

「ちー（しかし、）これで下準備は完成だ、後はあのカードを引ければ」

魁吏は、頭に中で計算し

「俺は、魔法カードの光の護封剣を発動しターンエンド！」

魁吏場

モンスター 森の番人グリーンバブーン AKT2600
光の護封剣（1ターン目）強者の苦痛

「私のターン、ドロー！」

「カモンの効果を発動します！！攻撃を放棄することで相手の表示のされている魔法、罠を破壊することが出来る。私は、カモンの効果で魁吏殿の強者の苦痛を破壊する！」

カモンは手に持っていた爆弾を投げ、強者の苦痛を破壊した。

「でも、今グリーン・バブーンを倒す手段が無いから、イロウとカモンを守備にして伏せカード一枚セットしてターンエンド」

天原場 六武衆イロウAKT1400
六武衆カモンAKT1200

伏せカード2枚

手札0

「俺のターン、ドロー！（来た！！！俺の切り札）俺は、魔法力一ド、大寒波を発動！このカードは次の自分のターンまで魔法、罠をプレイする事が出来ない魔法カードだ、俺は、さらに墓地からおとぼけオポッサムの効果を発動しフィールドに2体蘇生させる！」

魁吏 場

モンスター おとぼけオポッサム×2 AKT600
グリーン・バブーンAKT2600

「い、一気に三体もモンスターが！」

離れていた十代達も

「すげ～一気に場を固めやがった。」

「でも、おとぼけオポッサムじゃあ、六武衆達には勝てないですよ？」

「彼も、それは重々承知のつもりでしょ……しかも、大寒波で魔法、罠を封印した事も気になるわ（しかし、どうするつもりなのかしら？）」

「見せてやるぜ、この『テッキの真のエースモンスター』にしてマイファイバーリットカードをな！」

「グリーン・バブーンが切り札じゃ無いの！？」

「コイツは、双角の一つだよ。俺は、おとぼけオポッサム2体とグリーン・バブーンをリリースする！」

「グリーン・バブーンを生贊！そこまでして出すモンスターって！？」

魁吏は笑みを浮かべながら叫んだ。

「出でよ、神の名を持つ聖なる獣！神獣王バルバロス降臨せよ！！」

魁吏 場

モンスター 神獣王バルバロス A K T 3 0 0 0

「し、神獣王バルバロス！獣戦士族の中でも最高級のレアカード…」

「美里、油断しないで！バルバロスの効果はこれからよ…」

呆然とする天原に明日香は言い、

「明日香の言う通りだ！獣王バルバロスの効果発動、このカードを三体リリースで召喚した場合、相手フィールドを全て破壊する！」

「なつ！？私のフィールド全体を破壊効果！なら、リバースカードオープ！」

「無駄だ、大寒波によつて魔法、罠は使用不可だ！」

明日香は魁吏のその言葉を聞き

「そういうことだったのね！」

十代はまだ意味が分かつていないうらしく明日香に聞いた

「明日香、どうこう意味だよ。」

「神獣王バルバロスは確かに強力モンスターだけどチエーンで奈落の落とし穴や天罰で破壊される可能性もあるわ。しかし、彼は大寒波によつて魔法、罠を使用不可にしてバルバロスの効果を100%使つたのよ…」

「正解だぜ、明日香！バルバロスを確實に効果を使い、場に残すにはこうするのが一番なんでね。さてと、バトルフェイズだ！神獣王バルバロスの攻撃！スパイラルセイバー！」

天原ＬＰ2600 - 400

「じゃあ、翔はかえしてもらひうぜ。」

「ええ、こっちも色々と勉強になつたわ。特に魁吏にはね

明日香が魁吏を見ながら言い、天原が魁吏に近づいてきた。

「どうした、天原？」

「あ、あの・・・で、できれば今度からは名前で呼んでくれませんか？あそこまで、本気になつたのは久々でしたし、呼んでほしいので／＼／＼　ダメですが？」

天原が、ウルウルした眼で魁吏の事を見て

「（だから、こんな目で見られたら断れねつてのーー）わ、分かつた、美里。」

「は、はい！－魁史さん」

「や、さて。用事も済んだ事だしせつねと帰つて寝るかー！」

「お、おい。待てよ、魁吏！」

「待つてくださいつす〜アーキー魁吏君」

魁吏達が言つた後

「美里、貴方から男子に名前で呼んでほしいなんて珍しいではありますか？」

「そうですね、美里さん。どうしてですか？」

モモコとジョンコが一や一やしながら美里に迫っていくと

美里は、寮に向つて走つていつた

「ふふふふ。（それにしても、如月魁吏。思つた以上に面白いわね・
・今度は、私がデュエルしたいわね）」

ボートの上では

「 」 「 」 「 」

2人が、魁吏の方も見てニヤニヤしていたので

「お前ら、早く帰るんだから漕げよ……」

「まあ、良いじゃんか。」

「やうすよ。僕と違つて、春が近づいてくるんっすから

翔のニヤケ顔が以上にムカついたのか魁吏は

「おい、翔、十代……入つてどのくらいの重さで沈むのかな……

・

「さつさと帰つて寝るッす。明日も学校つす。」

魁吏から、オールの奪つて凄まじい早さで漕ぐ翔であった。

「…………魁吏、ボソつとは怖いぜ…………」

第五話　ＶＳ天原　侍対獣（後書き）

「お！」

・・・・（眼を合はせない）

- おしゃべり !

な、
なにか
・
・
・
・

「投稿し忘れるつてなんだあ！！！しかも、今回のデュエルで使つたデッキは元お前の一軍だろ？が…！」

ご、ごめんなさい！－読者のみなさんと我が獣テッキに對して本当にすみませんでした－！

「今度は、気を付けよな。」

はい（涙）

第六話 昇格試験 前篇（前書き）

再投稿です

第六話 昇格試験 前篇

あれから、数日がたち進級試験の日が近づいてきた：

え、試験はどうなんだって？いや、大丈夫じゃね、まあ勉強はしておくれけどね

翔は原作通りに死者蘇生に祈っている、なんだる。アレを見ているとカードを地獄からの呼び声やら降格処分やら反対のカードに変えたいと思ってしまうのは…

思つてしまつたなんなら仕方ないよね

翔にバレないよう、三枚の死者蘇生を地獄からの呼び声・降格処分・地獄からの呼び声と言う順に置き換えて置いた。

その夜に、隣からなにやら叫び声が聞こえたような気がしたが気のせいだな。

「ふあ～少しばかり頑張りすぎたかな？」

目を擦りながら、外に出てみると翔からドーンという効果音が合いつつな雰囲気を出していた。

一緒に歩いていた十代が魁吏に気づき走ってきた

「おふあ～十代。」

「ああ、おはようじやなくて…魁吏、あれびつするんだよー。」

十代が翔の方を指を指しながら言った。

「ん～なんかあつたのか？」

「お前が、昨日死者蘇生を地獄からの呼び声やら降格処分に置き換えたのを知らずに祈り続けて、ようやく氣づいたと思つたら変な奇声を上げて口からなんか出でてきたんだ！」

「あ～、昨日の奇声は氣のせいじゃなかつたのか。良かつた、良かつた。変な電波を受信出来るよになつたのかと心配だつたんだが。」

「

魁吏が胸をなで下ろすと

「おー、やつこいつ問題じやないだりー。」

十代と魁吏の会話によつやく翔も氣づき、まるでゾンビのよつこいつに向かつってきた

「か～い～り～くん。君つすか？ 死者蘇生を地獄からの呼び声と降格処分に置き換えたのは…」

「ああ、それでか」

「それがじやないつす…ひどいじやないすつか、よつこよつて地獄からの呼び声にするなんて」

魁吏に掴みかかるよつこ言つてへくる翔に対して魁吏は

「馬鹿野郎、自分のデッキを信じずに使者蘇生だのみしているお前が悪い。そんな事をしているんだつたらデッキを見直して改良でもしてひ。」

魁吏に痛い所を突っ込まれ翔は蹲つて地面にのの字を書き始めてしまった。

「だつて、しかたないじゃないか・・・カードも枚数持つてないから、デッキも改良出来なかつたし」

「はあ～なら、今度からは俺の所に来い。色々とカードは余つているから、デッキを改良手伝つてやるから」

魁吏は額を手で押さえながら翔に言つた

「ホントすかーなら、お願ひしたいっす！..！」

「お、面白そうだな、俺もその時は混ぜてくれよ！..」

このよつた感じで、テストを受けた。

「はあ～筆記テスト、本当にめんどうかった・・・まあ、全部問題は埋められたからいいかな」

魁吏が机に伏せていると

「あら、どうしたの？もしかして、テストうまくいかなたつたのから？」

「そ、そなんですか、魁吏さん。」

「ちげ～よ。疲れただけだよ。明日香、美里」

そう、話しかけてきたのは明日香と美里だった。

「そりゃ、所で貴方は、カードを買いにいかないのかしら？十代や翔君は買い物にいたんでしょ？」

「俺には必要ないな。それに急にカードを追加してバランス崩しても大変だしな。」

明日香達とご飯を食べ、午後の実施試験へ向かつた

そして、試験が始まり、十代は万丈目に勝ち他の皆も

「ドリルロイドで止めつす……」

「行け、ウォータードラゴン……！」

「代将軍 紫炎を筆頭に皆で止め……」

翔も、前日にデッキを見て調整してあげたおかげか、らくらく勝っていた（相手は、同じオシリスレッドだけれども……）

「しかし、美里のあれを見るとただのいじめに見えてくるのは俺だけかなあ～」

「仕方ないわよ、あれの爆発力が六武衆なんだから。」

後ろを振り返ると、明日香とえーと……あ、モモヨヒジュンコ

がいた

「ちょっとーー今、私達の名前忘れていなかつたーー！」

「明らかに、反応が遅かつたですわよーー！」

「ははははは、所で明日香？お前、まだ試験やつていなかつたよな？」

「ふふ、ええそりよ。何時になつたら始まるのかしら。」

最初の笑いに少しだけ不安が過つた、こうしていると階段から試験を終えたばかりの美里と十代達が上がつてきた。

「おつかれさま、皆。じつだつた、試験は？」

魁吏が聞くと

「いやートメさんからパックを貰つていなかつたら負けてだぜーあー良かつた」

「JUJUちも、問題はない。むしろ、本氣が出せなかつたがな。」

「魁吏君が、昨日アッキを弄つてくれたおかげで回りが良かつたすーーありがとうーー！」

「わ、私も大丈夫でしたーー魁吏さん達はまだなんですか？」

美里が、魁吏と明日香を見て言った

「ああ、全く。早く、終わって欲しいもんだぜ。」

魁吏がため息をはくと

「そう、長くは待たないと思つわよ。ほとんどの生徒が試験を終えてこむからそろそろでしょ。」

明田香は相変わらず笑つて言い、そこに

『オシリスレッド　如月魁吏君。オシリスレッド　如月魁吏君。まもなく試験を開始します。特定の位置で用意してください』

「お、みやづか。わひと、じゃあ油断せずにがんばつてくれるかな。

』

「おひ、頑張つてこよ、魁吏……」

「頑張るつすよ……」

「君なら、そう簡単に負けはないと思つが頑張れ。』

十代、翔、三沢の順に声を掛けてくれて

「あ、あの……頑張つてくださいね……」

顔も、真っ赤にしながらも魁吏を応援した美里に

「おひ、ありがとな、頑張つてくれるよ……！」

そして、デュエル場に着いたはいいが

「おい。なんで、相手がお前なんだ？明日香・・・」

そう、魁吏の対戦相手は魁吏の後に呼ばれた明日香だった。

「あら、知らないの？オベリスクブルーにはね、相手も選択する事が出来て許可が通れば試験を受ける事が出来るのよ。」

明日香は、悪戯を成功した子供のように笑っていた

「さつきから、ひたすら笑っていたのはこれだつたのか・・・しかたね、迷つていたつて仕方がない！さあ、やるか、明日香！」

「ちょっと待つて、ただデュエルするだけじゃあ面白くないから少し賭けをしないかしら」

あの、優等生の明日香からは信じられないような言葉が出てきたが

「賭けだあ～ 一体何を賭けるつて言つんだ。」

魁吏は、明日香を真つすぐ見て言い、おもむろに明日香は言った

「もし、このデュエルで私が勝つたらシンクロモンスターとそれに必要なチコーナーを少し分けてくれないから

魁吏は、その言葉を聞き仰天した

「明日香、お前分かつて言つているんだよな。それを条件に出すつていう事はそれなりに対価を払つ覚悟があるんだな？」

魁吏は、明日香を睨むようにして明日香は

「ええ、分かっているわ。でも、あなたが見させてくれたあの美しいモンスターを自分も使ってみたいという感情が日に日に高まっていくのよ。だから、こんな賭けを提案したのよ。」

明日香の眼は確かに、覚悟の決めていた

「分かった、約束しよう。もし、お前が勝つたらシンクロモンスターとチューナーモンスターをくれてやるよ。ただし、負けだ場合、この条件を飲んでもらう!」

「いいわ、そのくらいの覚悟がなければこんな事を言つわけがないもの。わあ、その条件とは何!?!」

明日香が生きこんできいた

「ああ、もし負けたら・・・・・お前とモモコとジロンゴ、それに美里は明日超マニアのチャイナ服で授業を受けてもらひ。」

「・・・・・・・・・はつ?」

『 』『 』『 』『 』『 』『 』『 』『 』『 』『 』『 』『 』『 』

「ちよ、ちよっとなんでそこそこ、美里達の名前が出てくるのよーーー。」

『 』『 』『 』『 』

「ヒーヒー大事なカードを賭けるんだ。そっちもそれなりの対価は必要だろ?」

「それでも、モモコ達も巻き込むのは、いいです……明日香様」ジ
ュンゴー。」

「明日香さん、私達は明日香さんと一緒に何も怖くありませんし、必ず勝つてくれる信じています！！」

「モモコ、分かったわ。ありがとうございます、一人とも。それと、『めんなさいね、美里。こんな事に巻き込んでしまって』

「い、いいえ。大丈夫です。それよりも、恥ずかしいのは苦手なので勝つてくださいね（魁吏さんなら、見てもらつてもいいけど）／＼／＼／＼」

「さて、そろそろ良いかな？明日香。」

「ええ、貴方の力、存分に見せてもらつわ……そして、約束通りシンクロモンスターをいただくわよ……」

「ぐつ、明日が楽しみだぜ……」

『デュエル！……』

第七話 昇格試験 後篇（前書き）

さて、後篇です。明日香との「トヨエルはどいつなんでしょう？」

第七話 昇格試験 後篇

『デュエル！』

魁吏 LP4000

明日香 LP4000

「私のターン、ドロー！ 私は、サイバーチュチュを攻撃表示で召喚し、カードを2枚セットしターンエンダード！」

明日香 場

サイバーチュチュ AKT1000

伏せ 2枚
手札 3枚

「俺のターン、ドロー！」

「魁吏、見せてもらいましょうか。貴方のシンクロ召唤をこの実戦で！！」

その言葉を聞いた魁吏は少し言葉を濁らせて

「え？ 悪い、明日香・・・」

「くつ」

「今日は、シンクロは使わないんだといふがこのトックにチュー！ナ

— そのものが入っていないだよね

「はい？？？？？」

F F F F F F

魁吏のその一言に、会場に残っていた生徒が叫んだ

「おー、魁更！今日は、シンクロは使わないのかよ～せつかく楽しみにしてたのに」

一世うかぐ
新しい元々が取れると思っていたんだかな。
残念だ。

等など、皆好き勝手な事を言つてゐる

「そんな、樂しみにしていたのに……なら、今回は前に美里と戦つた獣『テツキ』かしら？」

明日香も少なからず、意気込みがなくなつていったが

「いや、あれとは違うトコだしさ。でもシンクロも回るへじりこ恒田い事が起きた事になると想ひや。」

魁吏は、明日香の方を見て笑つた。

「シンクロと回りくらご極図ごありますか。どういふ事？」

「まあ、見てれば分かるよ。俺は、手札からレスキュー・ラビットを

攻撃表示で召喚…」

魁吏 場

レスキュー ラビット A K T 3 0 0

「シンクロを使わないのでそんな、攻撃力の低いモンスターで何をするつもり?」

明日香は、魁吏が召喚したモンスターをみて言った

「それはな・・・」いつするのさー・レスキュー ラビットの効果、このカードを除外する事でデッキから同名通常モンスターを2体特殊召喚する! 来い、マンモスの墓場を特殊召喚!」

魁吏 場

マンモスの墓場 A K T 1 2 0 0 × 2

「な、魁吏。貴方は私を馬鹿にしているの!! モンスター効果を使つてまで召喚したのがたかが攻撃力が1200しかないマンモスの墓場なんて、バカにするのも体外にしなさい…!」

明日香は、魁吏が召喚したマンモスの墓場をみて明らかに怒っている。

「いや、明日香。俺は、バカに何かしてないぜ」

「なら、なんでこんなモンスターを召喚したのよ…」

「それはな、いつもするからや…俺は、レベル3のマンモスの墓場2体をオーバーレイ…!」

『 『 『 『 オーバーレイ！？！？』 『 『 『 』

「2体のモンスターでオーバーレイネットワークと構築！エクシーグ召喚、現れる！？！？」
20 蟻吉士 ブリリアントー！」

魁吏 場

?20 蟻吉士 ブリリアント AKT1900

「な、エクシーズ召喚！？！？」

「なんだ、あのモンスターは！？」

「シンクロ召喚とは違う新しい召喚方法！？」

魁吏が見せたエクシーズ召喚で会場内がざわめき始めた

「魁吏、何なのよ。そのエクシーズ召喚つて！？」

明日香もシンクロ召喚とは違う召喚方法でモンスターが出てきた事に驚いていた

「ああ、このモンスターをシンクロモンスターとは違ひエクシーズモンスターって言つてな。このモンスターを召喚するには同じレベルを持つモンスターを素材にする事で召喚する事が出来、このモンスター達にはレベルがなく、ランクという形で決められているモンスターなんだ。後は、効果を持つエクシーズモンスターは素材となるモンスターを取り除く事で効果を発揮できる事かな？」

魁吏が、エクシーズ召喚とエクシーズモンスターの説明をし終える

と明日香の眼はさつきまでとは違こまるで、子どもが新しいおもちゃを買つてもらつたような田でキラキラと輝いていた

「面白いわ。確かに、シンクロ召喚と同じ位にいえ、私はまだシンクロモンスターとは戦つていなかからそれ以上にワクワクするわ。」

「喜んでもらつてうれしいが、これはデュエル中なんですね。続いて、蟻岩土ブリリアントの効果発動、オーバーレイユニットを一つ使い自分フィールドにモンスター全て攻撃力を300上げる事が出来る、これによりブリリアントの攻撃力は2100に上昇する。バトルフェイズに移行し蟻岩土ブリリアントで攻撃、クラッシュユブレイク！」

「させないわ。伏せカードオープン、和睦の使者…これにより、私のモンスターは破壊されずダメージも0になる。」

「なら、3枚カードをセットしターンエンド。」

魁吏 場

蟻岩土 ブリリアント A K T 1 8 0 0

伏せカード 3枚

手札 2枚

「私のターン、ドロー。私は、融合を発動させ手札のエトワールサイバーとブレイド・スケイターを融合しサイバーブレイダーを融合召喚するわ。」

明日香 場

サイバーブレイダー A K T 2 1 0 0

「さつそく出てきたか。めんどくさいモンスターだな。」

「めんどくさいとは随分な言い方ね。まあ、いいわ、バトルフェイズに入るわ。サイバー・ブレイダーで蟻岩土ブリリアントを攻撃！」

「ぐ、お互いのモンスターは2・100が・・・」

「その様子だと、知っているよつね。サイバー・ブレイダーの第一に効果相手の場にいるモンスターが1体のみの場合、このカードは戦闘では破壊されない。よつて、蟻岩土 ブリリアントを破壊するわ。」

「ちつ（くそ、）JのカードはOOG版だからアニメ版のよつな効果は持つていない。」

「残念だつたわね、せつかく出したエクシーズモンスターだつたのに破壊されてしまつて。続いて、サイバーチュチュでダイレクトアタック！」

魁吏 LP4000 3000

魁吏は、明日香を見ながら

「ああ、まさかこんなに早くこいつを破壊されるとは思つていなかつたよ。さすがは、オベリスクブルー女子筆頭だけはあるな。」

「あり、こんなことでもう諦めてしまったのかしら？」

「なめるなよ。勝負はここからだ。」

「そう、良かつたわ。こんな事であきらめてしまつたら面白くない

もの。私は、これでターンエンドよ。」

明日香 場

サイバー・ブレイダー A K T 2 1 0 0 （戦闘破壊不可）

伏せ一枚

「おつと、Hンドフェイス時にリバースカードオープン サイクロン！お前のリバースを破壊させてもらうぜ。」

破壊されたのは、ホーリライフバリアだつた。

「そして、俺のターンドロー！（来た、このデッキのエースモンスター！）俺は、魔法カードD・D・Rを発動する、手札から一枚手札を捨て除外されているモンスターに装備する。俺は、レスキューラビットを特殊召喚！」

魁吏 場

レスキューラビット A K T 3 0 0

伏せ 2枚

「あら、今度はどんなエクシーズモンスターを召喚してくれるのかしら？」

明日香は、レスキューラビットを見ながら笑つたが魁吏は

「明日香、これから出すモンスターはこのデッキのエースであり最強の相棒だ。その目に焼き付ける！俺は、レスキューラビットの効果でデッキからジョンネティック・ワーウルフを一体特殊召喚！」

魁吏 場

ジェネティック・ワーウルフ A K T 2 0 0 0 × 2

「（レベル4を）一体・・・ランク4のエクシーズモンスターかしらけど！」相手の場にいるモンスターが2体のみの場合このサイバー・ブレイダーの攻撃力は2倍となるよって、攻撃力は4200さあ、びびする魁吏！」

「行くぜ、俺は一体のジエネティック・ワーウルフを生贊に現れろ銀河から生まれた光の龍、銀河眼の光子竜 ギヤラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン！！」

魁吏 場
銀河眼の光子竜 A K T 3000

「綺麗。何、そのドラゴンは・・・」

明日香は、いや会場中が魁吏が召喚した竜に見とれた

「綺麗・・・」

「うつくしい」

「あの眼に引き込まれそうだ・・・」

会場の皆は思い思ひ口にした

「UJの竜は眼に銀河を宿し神聖なる竜、その力はデュエルキング武藤遊戯のライバル海馬瀬戸が持つ青い眼の白竜を超える。」

「な、あの青い眼の白竜を超える力ですってー？」

「まあ、そのかわりにこのモンスターは通常召喚が出来ず、攻撃力2000以上のモンスターをリリースしないと出せないがな。さらに、リバース発動！リビングデットの呼び声、甦れマンモスの墓場を蘇生し、使者蘇生を発動もう一体のマンモスの墓場を復活させる！！」

魁吏 場

銀河眼の光子龍 A K T 3 0 0 0

マンモスの墓場 A K T 1 2 0 0 × 2

リビングデットの呼び声

伏せ 1 枚

「また、エクシーズ召喚！？」

「行くぜ、マンモスの墓場一体をオーバーレイ、2体のモンスターでオーバーレイネットワークと構築！エクシーズ召喚、現れる！！？ 17 リバイス・ドラゴン！」

魁吏 場

銀河眼の光子龍 A K T 3 0 0 0

リバイス・ドラゴン A K T 2 0 0 0

リビングデットの呼び声

伏せ 1 枚

今度は、魁吏の場に青い龍が特殊召喚された。

「また、？なの！？ 何枚あるのよ、？つて！」

・・・99枚あるらしいけど、言わない方がいいな。見せろって
言われたら困るし

魁吏 場

銀河眼の光子龍 AKT3000
リバイス・ドラゴン AKT2000
リビングデットの呼び声

伏せ 1枚

「攻撃力3000と2000のモンスターを2体・・・しかも、一
ターンの間でこんな」

「俺はリバイス・ドラゴンの効果を発動する。このカードはオーバー
レイユニックトを一つ使う事で攻撃力を500上げる事が出来る。
よつて攻撃力は2500だ！そして、俺は通常召喚を行つていない
！！俺は、手札からセイバー・ザウルスを召喚する。これによつて、
俺の場はモンスターが3体よつてサイバーブレイダーの効果は変わ
る。

銀河眼の光子龍 AKT3000
リバイス・ドラゴン AKT2000
セイバー・ザウルス AKT1900
リビングデットの呼び声
伏せ 1枚

「サイバーブレイダーの第三の効果は相手の場にいるモンスターが
3体の場合相手の魔法・罠・モンスター効果を無効にするけど」

「ああ、此処までいたら問題はないな。さてと、バトルフェイズに入るぜ！ やれ、銀河眼の光子龍の攻撃、破滅のフォトン・ストリーム！」

銀河眼の光子龍の放つたブレスがサイバー・ブレイダーを破壊した

明日香 LP40000 3100

「くつ、サイバーブレイダーが！」

「まだだ！セイバー・ザウルスでサイバー・チエチエを攻撃！」

破壊の衝撃が明日香を襲つた

明日智
L P 3 1 0 0
2 2 0 0

「止めだ！ リバイス・ドラゴンの攻撃、くらえ、バイス・ストリー

「れやああああああああああ——」

明日香 LP2200 - 300

『勝者
如月魁吏！！』

「よし、俺の勝ちだな。明日香」

魁吏は、明日香に手を伸ばし立たせる

「ええ、私の負けよ。またか、シンクロじやなくエクシーズ召喚なんて違つた召喚方法を使つなんて驚いたわ。」

「で、どうだつた？シンクロと回じへりに面白かったか？」

「ええ、とてもね。でも、今度はシンクロと戦つてみたいわね。」

「ああ、その時を楽しみにしてるよ。」

『おめでとう、如月 魁吏君。そして遊城 十代君。君たちは格上であるオベリスクブルーに果敢に挑み勝ち、如月君の場合はまた違つた召喚方法で勝利した。君達をラーハロードに昇格しよ。』

その後、十代は原作通りオシリスレッドに残り、魁吏は素直に昇格を受け取リラーハロードに上がった。

おまけ

「おー、所で約束は忘れていないだろ?」

「「「「ギック!」」」

「明日は、約束通り超!!!チャイナだから~

「「「「こ、いや~~~~~!」」」

その翌日、四人は約束通りチャイナ服で受けた。

「いや～良い物を見た」

第七話 昇格試験 後篇（後書き）

「なあ、これってマジなのか？」

「なにが？」

「いや、マンモスの墓場の事がだよ。」

「ああ、これは実際に俺のデッキの中に入っているカードだよ。」

「なんで！？なんで、マンモスの墓場！？レベル3のバーラモンスターなら他にもいるじゃん。ハウンド・ドリゴンやマッド・ロブスター やアーリー！」

「いや、最初はそうだったんだけど実は……」

「実は？」

「初代主人公が使ったカードを使ってみたいといつのが理由かな？
はははは！」

「くそ、スパイラル・シェイバー！……！」

「あぶね！何しやがる！攻撃力3000で攻撃してきやがって！」

？

「馬鹿か、お前は！？そんな理由でマンモスの墓場を入れたんかい！」

「いや、他にも理由はあるぜ？ラビット効果で特殊召喚すると奈落の落とし穴で一体とも除外されるんだよね。だから、攻撃力1300のマンモスの墓場を入れたんだ。」

「なるほど、でも最終的にエクシーズで除外されたら意味が無いんじゃないか？」

「でも、墓地腮じにはなるだろ？そういう意味でもマンモスを選んだ。」

「なるほど、一応頭は使っているんだな。」

「一応とはなんだ、一応とは。でも、俺はマンモスで止め刺した事があるぜ。」

「つそだ！」ひぐし風

「つそじやね！手札に止めをさせられるカードがそろって勝てたんだ。」

「ありえね～」

「では、また次回に会いましょう。」

「「ぱいぱーい」」

試しに、止めを刺した時の手札

死者蘇生
グラムモール

大嵐

の三枚です。最後のドローで死者蘇生を引いたので大嵐 グランモール召喚 死者蘇生でマンモスの墓場という順で止めを刺しました。

第八話 登場！魁吏の精霊達（前書き）

今回は、ついに魁吏の精霊が登場します。の内出していきたいと思います。

精霊は複数いますがそ

第八話 登場！魁吏の精霊達

「・・・ネエ。ハヤク、ボクのコトニキヅイテ！」

「俺様をいつまでも無視するとは一度胸だな、旦那。俺達は、早く旦那に会いたいんだぜ。」

「ボク、俺達に早く氣づきな（い）！他の中間達も待つていろ（せ）（三）。」

「はつ！な、なんだ、今の夢は夢にしてはかなりしつかりとした夢だつたけど・・・」

とある朝、前回の昇格試験でラー・イエローに昇格が決まった魁吏はベットの飛び上がるかのように起きた。この不思議な夢によって起された魁吏、これが魁吏と精霊達との最初の接触だった。

「さて、どうすつかな。暇だしテッキの調整でもするか、まずは明日香と戦った準獣テッキの中身を調整するかな。」

そうい、朝からテッキを調整し始め3時間くらいが経つたころアから

「お～い、魁吏少しいいか？」

『ゾンビ』

十代の声がじドアを叩く音が聞こえてきた。

「ああ、いいぞ。鍵は開いてるから勝手に入ってくれ。」

そうすると、ドアの向こうには十代だけでなく翔と大地それと

「なんだ、チャイナと一緒にいたのか。」

「「チャイナって言わないで…！」」

そう、前回の昇格試験で賭けに負けてしまい一日チャイナ服で過ごした明日香と美里がいた。

「どうした、みんな？ わざわざ、ラーライエローの寮に来るくらいだ何かあったのか？」

「まあ、そなんだが… その前に部屋に入つていいか？ 廊下だと、ちょっと」

確かに、オシリス寮と比べて広くなつたが十代、翔、大地、明日香、美里が部屋の前で集まれば邪魔になる。

「わかつた、とにかく入れよ。」

そして、みんな魁吏の部屋に入つていった、そして机の上に置いてあるカード達を見て大地は

「もしかして『デッキ』の調節でもしていたのか？ すまない、邪魔をしてしまつて。」

「ああ、気にしなくていい。邪魔されるのは、オシリス寮で慣れた、毎回デッキを弄つてると粗つたかのようにこいつらが部屋に突入し

てぐるからな。」「

魁吏は、十代達を指しながら言つた、言われた十代達は笑いながら視線を外したのは言つまでもない。

「で、どうしたんだ。十代達はいつも事だとして、大地や明日香達が一緒だなんて。」「

「ああ、実は今日用があるのは俺じゃなくて。「私達よ、魁吏」と云ふことだ。」「

魁吏の前に一步前に出てきた明日香が十代の言葉をえり言つた。

「明日香が俺にか?じゃあ、美里と大地はどうしたんだ。」「

「私は、明日香さんと同じ理由で来ました。」「

「俺は、面白そつだつたから着いてきただけだ。」「

美里も明日香と回りよつて一步前に出て、大地は笑いながら言つた。

「なるほど、で俺に用つて何だ?もう少しで、獣デッキにシンクロを混合するためにデッキを見直してくるんだが。」「

「そのシンクロに関係する事なの・・・」

そうすると、明日香と美里がいきなり頭を下げる

「お願い、シンクロ召喚とエクシーズ召喚について色々と教えて!私、最初は興味本心でしか考えていなかつた。でも、貴方とのデ

ユエルしてもつと知りたいと思つたのお願い…」

「私も、魁吏さんの『ユエル』を見てもつと強くなりたいって感じた
のお願いします…」

二人の姿を見て魁吏は

「なるほど、いいぜ。その意気込み嫌いじゃないぜ。なら、明日香
にあつたシンクロとチュー、それとエクシーズを見ないとな、十
代達も手伝えこの量を確認するのは大変なんだから。」

魁吏は、積み上げられた段ボールを指さしながら言った

「ああ、分かつたぜ。よし、やるか！」

そして、階でカードを探そうとする美里が

「あ、あの、魁吏さん。私には探してくれないんですか…？」

「お前用には、もう七星は付いているんだよ。ビルに置いたかな?
えーと、有つた有つた、ほらこれだよ。」

魁吏は、段ボールとは違つ箱からカードの束を美里に渡した。

「なーーなんですか、このカードは…？」

美里の反応を見た十代達も、美里に渡したカードを見た

「うー、これは・・・六武衆?いや、これは真六武衆…?」

そう、美里に渡したカードは六武衆が進化し爆発力がとんでもないカード真六武衆シリーズだ。

「これは、美里が持っている真六武衆が進化した姿だ。試しに、どんな動きをするか見せてやるから良く見てろよ。」

「は、はい」

そして、真六武衆の主な動きを見せたら他の連中の動きが止り、次々と明日香と翔は顔を引きつりながら

「これは・・・」

「なんすか、この爆発力は」

大地は、眉間を押さえながら対策を考えていた。

「これは、場を固める前に瞬殺されるぞ・・・これに対して、どう対策をとれば」

十代はどうと

「すげー、早く戦つてみてー」と眼を輝きながら言っていた。

（作者は、大会で何度も戦いひどい目に合っています。あの爆発力は一体何なんだよ！手札にゴーズカトラゴ、バトルフェーダーがなければ一瞬だつて！！）

なんか、電波が飛んできたがそれは、置いといて

「後は、これをどう使いこなせるかはお前次第だ。がんばりな。」

しかし、美里は真六武衆を見ながら

「私なんかに、こんな強力なカードを使いこなせるでしょ？」「

「はあ～お～、美里」

「は、はー。」

そうすると、魁吏は美里の額にビッシー言い面の「パンパンがした。

「あ、あう・・・な、なにをするんでしか。」

「なにをするんですかじゃね～よ。あたしなんかなんていうな、強くなりたいから此処に来たんだろ？だったら、絶対に使いこなすつていう気迫で行けよ。見込みない奴には、カードは絶対に渡したりはしないんだからよ。」

魁吏は、笑いながら美里の頭を撫でた。

「よし、次は明日香の奴だな。明日香のデッキは戦士だったよな？」

「え、ええ。何か、相性のいい奴はあるかしら？」

「せうだな。まずは、ジュッテ・ナイト」のカードは・・・・・・

こいつして、3時間余り明日香に合づチヨーナーやらシンクロを選んだ。ついでに、大地にもシンクロ関係を分けようと思つて言ってみたら

「俺は、シンクロよりもエクシーズ召喚に興味があるからそつちを重点に教えてくれないか」とエクシーズについて教えた。

その後、デッキの調節をするために何度もデュエルをした。

「しかし、美里の奴すごいな少し教えただけでかなり使いこなせるようになっていた。しかし、疲れた、今日は早めに休むかな?」「ソウダよ。カラダハちゃんとヤスメナイと」ああ、そうだな。無理して体を壊したらたい・・・へんだ?」「

不意に魁吏の頭の上から声が聞こえてきた。

「だ、だれだ!?!」「

魁吏が上をむいてみるとそこには、体が機械で出来ており額にはloveと書いてあるウサギ?がこっちを見ていた。

「お、お前、もしかしたらいやもしかしなくても『メカウサー』か?」「

魁吏がそういうとメカウサーは魁吏に向って落ちてきた。

「ソウダヨ、ヨウヤクニンシキデキタンダね。」「

「お前、もしかして精霊か?十代のハネクリボーミたいな。」「

「へ、そうだ。よつやく気付いたが、旦那。」「

メカウサーとは違う方から声が聞こえその方向を見てみると机の上に、背中に何やら大砲?を背負っているハ虫類みたいなモンスター

がいた。

「お前、幻銃士か？」

そう、そこにいたのはメカウサーと共に獣テッキに入っているお気に入りのカードの一枚幻銃士だった。

「やうだぜ、全くようやく俺達を見る事が出来るようになったか。こつちは、何度も呼びかけてたつて言つのことよ。」

「呼びかけてた？もしかして、今日夢で見た奴はもしかして！？」

「ソウダヨ、ボクタチがずっとカイリにムかつてヨビカケテいたんだア。」

メカウサーは魁吏のあぶらの上に乗つて見ていた。

「なあ、何でいきなりお前達の事が見えるよつになつたんだ？今まで、ずっと見えなかつたのに。」

「旦那、それは俺達を召喚したからだぜ。前回では俺達は召喚はされなかつたからな、今回召喚してもひつよつやく入口が安定してみる事が出来るよつになつたんだぜ。」

「どうか、前回はあとぼけしか使わなかつたし見る事が出来なかつたのか。所で、夢での話で他の仲間つて他にもいるのか精靈が？」

魁吏は、メカウサーを抱きかかえながら幻銃士の隣に座つた。

「ああ、他に3体程いるけどまだ召喚されていないか条件が適つて

いないから現れる事が出来ないけどな。」

「条件?」

「ソウダ曰、ボクタチはチャンとジョウケンをクリアしていい（
実体化）デキルヨウニナツタンダ。」

「なるほど、お前らの条件は何なんだ?」

「俺の条件は、デュエルでフィールドに俺のトークンを三体以上出す
ことが条件だ。」

「ボクは、リクルータコウカでイッタイすつ、ばにダスコトがジョ
ウケンナンだよ。」

「やうか、なら名前を付けてやらないとな。でも、今日はもう眠い
からまた今度考えてやるよ。お休み。」

「ああ、お休み曰那。」

「オヤスミ、カイリ。」

「うして、魁吏に精霊が付いた

第八話 登場！魁吏の精霊達（後書き）

「なあ、なんでメカウサーと幻銃士が精霊なんだ？」

「ああ、第5話に登場した獣デッキがあったる。このカードは、どっちも作った当時からずっと入っているお気に入りのカードなんだ。

「なるほど。でも、お前の行きつけのカードショップでも『メカウサー』使つてお前の前以外で見た事が無い』って言われたよな。」

「そりなんだよ。こんなに可愛いし、効果で500ダメージは地味に痛いと思うんだけどな」

「せういえば、この一体どっちもバーン効果持つていいよな？幻銃士は銃士と名のつゝモンスター一体に付き300のダメージだし。」

「それは、たまたまだよ。」

「他に精霊はいるのか？」

「まあ、一軍から精霊を出そうかなと思つてはいる。」

第九話 廃寮探検（前書き）

タイタン編のお話です。じつぞーーー！

第九話 廃寮探検

「廃寮に探検だと？」

いつのよつこ、十代達は魁吏の部屋に来ていた

「ああ、こないだレッド寮で怖い話をしていたら大徳寺先生から聞いたんだけど昔廃寮になつた所があるらしいから探検しようつて話になつたから誘いに来たんだ。もちろん、行くだろ？」

十代は当然のように言つてくるが

「（廃寮・・・ってことは、若本のいやタイタンつて言つた方がいいか此処は。）デーモンデッキは見た感じめんどくさいけど、あの声を生で聴けるのは大きいな・・・多分デュエルするのは十代だろうし、念のためにデッキを一つ持つて行けば大丈夫だろう。）よし、行こう！」

魁吏は机の上にあるデッキの一つを持ち制服の内ポケットへと入れ部屋を出た。

「しかし、氣味が悪いな。幽靈は置いといてもかなり怖いぞ。」

「そつすね。ここまでつす暗いと本当に何かでそつす。」

「そつ、言つなん~翔。そつ言つていると出るフラグなんだな。」

翔は、腕を抱えながら左右を見ながら進みその後ろに隼人が続く。

「ちょっと、貴方達何をなつてこるの？」

ГАНФІЛ · ГАНФІЛ

不意に、聞こえてきた声に翔と隼人はびっくりしてしまいその場で腰を抜かしてしまい座り込んでしまった。魁吏と十代は声がした方を見てみると月明かりから姿がはつきりと確認できた。

「なんだ、明日香と美里じゃないか。どうしたんだよ、こんな時間にしかもこんな場所で？」

「それは、こっちのセリフよ。貴方達が大声を出したから美里がびっくりしてしまったじゃない。」

「あ、明日香さん。私は大丈夫だから・・・」

明日香の後ろには美里が居たが、さつきの翔と隼人の大声でびっくりしてしまったようで明日香の袖をしつかりを握り締めていた。

「あ、もしかして。明日香達も廃寮に肝試しに行くのか？」

十代は何時のように能天氣だつた。

「い、いえ。私は、明日香さんがあんな遅く外に出て行くのを見て追いかけてきただけです。」

明日香の方を見ながら美里は此処までの経緯を話した。

「貴方達、あそこに行くのは校則違反よ。早く帰りなさい。」

明日香は、少し睨みを利かせながら魁吏達の方を睨んだ。

「え、お前も廃寮の所に行く所だつたんだろ。なんで、俺達だけ帰らなきゃならないんだよ~」

「違うわ。私は・・・」

「明日香、お前何か隠しているんじゃないのか。」

今まで黙っていた魁吏が静かに口を開いた。

「お前、もしかして廃寮の行方不明者の中に知り合いでいるんじやないのか？」

二〇一

魁吏が放った言葉に明日香は少なからず驚いてしまつた。

「……ええ。行方不明者の中に私の兄『天上院 吹雪』が居たの

「…………」

魁吏以外は驚いた。

「なら、廃寮に行こうとしたのは何か手掛かりを探しに行く所と言つた所か？お前も、かなり無茶をするな。」

「ほつといて頂戴。これは、私個人の問題なんだから首を突っ込んで！！」

明日香は、走りながら廃寮の方へと走つて行つてしまつた。

「おい、魁吏……」

「ああ、本当に世話がかかる姫だ。お前達も一緒に来い、はぐれると逆に危ない。」

「はい（つすー）（なんだな）」

「しかし、本当にボロボロだな。」

「でも、レッド寮よりはかなりいいぜ。俺、じつじて引っ越し越してこようかな？翔達もどうだ。」

「いやつす（なんだな）……」

たゞがの一人もこの不陰氣には無理があるらしい

「あら、これは……」

美里が何かに気づき手に取つた

「どうした、美里。なにか、見つけたか？」

みんなが、美里の方へ集まり手に取つた物を見ると

「『NOHON』ってこれもしかして。」

その瞬間、部屋の奥から

「今の声って！」

「ああ、明日香の声だ！！」

（ようやく）現れたか。（よし）声がした方へ行くぞ！」

三人は部屋の奥へと走り出した。

一
表 待アニキ
魁吏君ノ

「おいらを置いていかないでほしんだな」「

後ろから翔と隼人が疾風になりながら走って行った。

「此処は！！」

部屋の奥へと走つて行くところの間にか向やう座して所へと出た。

「明日香さん……」

美里が見る方に田を向けてみると棺に入れられた明日香がいた。そして、その後ろから

「誰だ、セニユーニーのはーー！」

棺の後ろから深く帽子を被り長いコートを着た男が現れた。

「ふはははははーー！ よつやく來たかあー小僧共、我はタイタン、闇のデュエルを受け継ぐ者。遊城十代に如月魁吏、貴様ら我どデュエルをしろーい。我に書くことが出来たら彼女を解放しよう、しかし貴様らが負けた場合闇の罰を受けてもらひつ。」

「へ、話が早くていこや。じゃあ、此處は俺が「待て、十代。」「どうした、魁吏？」

タイタンに向おうとした十代の前に魁吏が割り込んだ。

「すまないが、此處は俺にやらせてくれないか？ 明日香を止められなかつたのは俺の責任だから俺がケリを付けさせてほしい。」「

十代は、魁吏の田を見て

「分かつたよ、今回は譲るけど必ず勝てよーー。」

「当然だーー誰に言つてやがるーー。」

「ふん、どつちが先でも変わりはないし。貴様は一人は共に罰を受けるのだからなあ～」

「それは、やつてみるまで分からぬいぜーー！」

魁吏とタイタンはお互いに向きあいデュエルディスクを構えた。

「「デュエルーー！」」

魁吏 LP 4000

タイタン LP 4000

「俺のターン、ドロー！俺は、フィールド魔法龍の渓谷を発動する。」

場 龍の渓谷

「俺は、効果で手札のドラグニティ・ファランクスを墓地に捨てデッキからドラグニティを手札に持ってくる、俺はドラグニティ・ドウクスを手札に加えそのまま召喚。」

魁吏 場

モンスター ドラグニティ・ドウクス A.K.T 1500

「お、今日はドラグニティかクロノス先生を倒してから使った所を見てないから楽しみだ。」

「今日は、どんな事が起きるのでしょうか。」

「さらに、ドウクスの召喚時効果により墓地にあるレベル3以下のドラグニティを装備する。俺は、墓地よりドラグニティ・ファランクスを装備する、さらにドウクスの効果より自分フィールドの存在するドラグニティと名のつくカード掛ける200攻撃力を上げる。」

ドラグニティ・ドウクス A K T 1 5 0 0 1 7 0 0

「俺は、さらに装備状態のファランクスの効果を発動しこのカードを特殊召喚する。」

魁吏 場

モンスター ドラグニティ・ドウクス A K T 1 7 0 0

ドラグニティ・ファランクス A K T 5 0 0

「さて、準備は整つた。」

「準備だと、そんな雑魚モンスターでぬあーにが出来るというのだ。」

タイタンは魁吏の場に召喚されたモンスターを見て笑つたがすぐにそれが間違いであると思い知らされる。

「これが、その答えだ!! レベル4のドラグニティ・ドウクスにレベル2ドラグニティ・ファランクスをチューニング!!」

「チューニングだと!!?」

「今ここに、仲間達の力で相手の強大なる力を突き破れ!! シンク

口召喚 現れるドラグニティ・ゲイボルク！！

魁吏 場

モンスター ドラグニティ・ゲイボルク AKT2000

「シンクロ召喚だと、何だそれは。」

「俺は、さらに一枚カードを伏せてターンエンド。」

魁吏 場

モンスター

ドラグニティ・ゲイボルク AKT2000

魔法・罠

伏せカード 2枚

「くつ。 我のターン、ドロオー！ 我は、デーモンソルジャーを攻撃表示で召喚。さらに、装備魔法デーモンの斧を装備する。」

タイタン（若本？） 場

モンスター

デーモンソルジャー AKT1900 2900

魔法・罠

デーモンの斧

「バアトルだ、デーモンソルジャーでドラグニティ・ゲイボルクを

攻撃！」

「なら、ドラグニティ・ゲイボルクの効果を発動！！！」

「なんだと！？」

「こいつは、墓地にある鳥獣族を除外する事でその攻撃力分アップさせる。俺が除外したのはドラグニティ・ドウクス、攻撃力は1500よつて攻撃力は」

ドラグニティ・ゲイボルク AKT2000 3500

「なんだと、それでは！」

「迎撃しろ、ゲイボルク！魔槍天羽」

剣から斧に変わったデーモンソルジャーにゲイボルクは持っていた槍で胸を貫いた。

タイタン LP 40000 3400

「ぐ、私は一枚カードを伏せターンエンド……」

タイタン 場

モンスター 0

伏せカード2枚

「俺のターン、ドロー！俺は、龍の渓谷の効果でファランクスを墓

地に捨てドラグニティ・ブラックスピアを手札に加える。俺は、霧の谷のファルコンを召喚。」

魁吏 場

モンスター ドラグニティ・ゲイボルク A K T 2 0 0 0

霧の谷のファルコン A K T 2 0 0 0

「その瞬間、伏せカードオープン！激流葬、ファイールドのモンスターをすべて破壊する！…」

「させるか、チーンでファルコンを生贊にゴットバードアタックを発動！…発動中の激流葬と伏せカードを破壊する！…（破壊したのは…・…ヘイトバスターかいやらしいカード入れやがつて）」

「だが、お前のモンスターは全滅だあ！」

「ち、俺はカード一枚伏せターンエンドだ。」

魁吏 場

モンスター

伏せカード1

「我のターン、ドロー。私はインフェルノ・クインテーモンを召喚！さらに、ファイールド魔法万魔殿 パンデモニウム 悪魔の巣窟を発動するう！」

場 龍の渓谷 万魔殿 パンデモニウム 悪魔の巣窟

タイタン 場

インフェルノ・クインテーモン A K T 9 0 0

「やつぱりそれが入っていたか。（まずい、龍の渓谷を破壊させた。）」

「インフェルノ・クインテーモンでダイレクトアタック！」

「うわっ！」

魁吏 LP 4 0 0 0 3 1 0 0

「カード一枚伏せ我はターンエンドーそして、闇がお前の体を蝕むぞ。」

魁吏の体の一部が消えた

「か、魁吏の体が！？」

「大丈夫つか、魁吏君！」

「ふあああ、どうするんだな！？」

「魁吏さん・・・」

十代達は体の一部が消えた事に驚き、美里は涙目になつてゐる。

「大丈夫だ、安心して見てろー。」

タイタン 場

モンスター インフェルノ・クインギーモン AKT900

伏せカード1

「俺のターンドロー！よし、俺は手札から調和の宝札を発動する！」

「調和の宝札？」

「なんすつか、その魔法カードは？」

「」のカードは手札にある攻撃力1000以下のドラゴン族チュー
ナーを捨てて新たにデッキから一枚ドローする。俺は、手札からド
ラグニティ・ブラックスピアを捨てて一枚ドロー、俺はドラグニ
ティ・レギオンを召喚！召喚時効果で墓地のドラグニティを装備す
る、俺はファランクスを装備。」

魁吏 場

モンスター ドラグニティ・レギオン AKT1200

魔法 養
ドラグニティ・ファランクス

「しかし、そのような雑魚で何かできる。」

「俺は、これで終わりなんて言つていないぜー俺は、装備状態のレ
ギオンをゲームから除外し現れる、ドラグニティの王よ、ドラグニ
ティ・レヴァテインを特殊召喚！」こつはフィールドにドラグニテ

イを装備しているドラグニティを除外する事で手札から特殊召喚できる、そしてレギオン達と同じように召喚・特殊召喚時墓地の存在するドラゴン族を装備する出来る俺はドラグニティ・ゲイボルクを装備！」

魁吏 場

モンスター ドラグニティ・レヴァテイン AKT2600

魔法・罠

ドラグニティ・ゲイボルク

「なんだとあ、攻撃力1200の雑魚が攻撃力2600のモンスターに変わった！？」

タイタンが驚いているが後ろでも十代達が

「すげー高レベルモンスターを生贊無しで召喚しやがった！」

「装備したモンスターを除外する事で特殊召喚出来るなんて、すごいモンスターす・・・」

「でも、なんでシンクロモンスターを装備したんだろう？今まで、ファランクスだったのに。」

「確かにそうですね。」

「あいつにはまだ隠された能力があるのか？」

「バトルフェイズだ！ドラグニティ・レヴァテインでインフェルノ・クインデーモンを攻撃！秘剣 つばめ し！」

「「「」」で、ネタか（ですか）（つか）！」

「ふははは、甘いぞ！トラップ発動、万能地雷グレイモア、これで
あさまのモンスターは破壊だあ！」

レヴァテインの足元で爆発が起きて破壊された。

「ああ、せつかぐのモンスターが。」

「これで、またお前のモンスターは〇だあ。」

「・・・・・それは、どうかな。」

魁吏は笑いながらタイタンを見た。

「何を言つている？」

爆炎により舞いあがつた煙が晴れしていくとそこにいたのは装備されていたゲイボルクが居た。

「な、なぜだ！？なぜ、こいつがフィールドに？」

「ドラグニティ・レヴァテインの効果が発動したんだ。こいつは相手の効果で破壊された時像微状態のモンスターを特殊召喚出来る、よつて装備されていたドラグニティ・ゲイボルクを特殊召喚したんだ！」

魁吏 場

モンスター ドラグニティ・ゲイボルク A K T 2 0 0 0

「こいつは、バトルフェイズ中の特殊召喚だ！よつて攻撃は可能、インフェルノ・クインデーモンに攻撃、魔槍天羽！」

「があああーーー！」

タイタン LP 3400 2300

「俺はターンエンド！」

魁吏 場

モンスター ドラグニティ・ゲイボルク AKT2000

「なかなかやるな、小僧！ 我のターン、強欲は壺を発動させてドロード。手札から使者蘇生を発動させインフェルノ・クインデーモンを復活させる。そして、ふはははは 墮落 フォーリン・ダウンを発動！」

「な、なんだとーーー！」

「墮落は自分フィールドにデーモンが居る時相手モンスターを奪う裝備力ードだ。よつてゲイボルクはいだく！」

タイタン 場

モンスター インフェルノ・クインデーモン AKT900

ドラグニティ・ゲイボルク AKT2000

魔法・罠

墮落

「バトルフェイズ、一体でダイレクトアタック！」

「ぐああああああああ！」

魁吏
卷之三
100
200

「私はターニングエントたあさあ体が消えるぞ

鬼吏の体の全体たほほ潤えた

魁吏（魁）（わん）――」」」

「まだだ、俺は。まだ負けてねえ！！俺のターンドロー！手札から強欲な壺を発動、一枚ドローする、（来た！！）俺は、ドラグニティ・ドウクスを召喚しファランクスを装備、そして解除させ特殊召喚、最後にチューニング！ドラグニティの戦士よその力で悪魔を打ち滅ぼせ！シンクロ召喚 現れろドラグニティ・ヴァジュランダ！」

魁吏
場

モントリオールシティタクシーアカデミー

「ヴァジュランダの効果発動し、墓地からドラグニティと名のついたドラゴン族を装備する。ファンクスを装備する。」

「またそいつか。いい加減あきるそお。」

「うるせえ。こいつが特徴なんだ、俺は最後の効果を発動するーー！」

「ターンに一度このカードの装備させているカードを一枚墓地に送る事で攻撃力はエンドフェイズまで倍になる、俺は、装備状態のファランクスを墓地に送る！」

「なんだと！ それでは・・・」

魁吏場

800 モンスター ドラグニティ・ヴァジュランダ A K T 1900 3

「攻撃力3800だと・・・」

「行くぞ、これが最後だ！ ドラグニティ・ヴァジュランダでインフ
エルノ・クインディーモンに攻撃、雷槍一閃！！」

タイタン
TP2300
-600

タイタンは、煙球を投げ逃げた。魁吏もその場に座り込んだ。

「あぶね〜ドウクスを引けなかつたらマジで負けてた。あそこで、堕落なんか引くか普通・・・」

そ
こ
に

「大丈夫か、魁吏？お前が、あそこまで追い込まれるなんてあいつ

中々強かつたな。」

「でも、勝てたから良かつたす。」

「せうなんだな。本当に良かつたんだな。」

「魁吏さん、本当に無事でよかったです。本当に・・・」

「悪かつたな、皆。しかし、『デーモン』トッキに此処まで追いつめられるとはまだまだ改良の余地はあるかな。」

魁吏は十代に手を貸してもう立つ

「さて、明日香を連れてさしあと此処から出ようぜ。いい加減氣味が悪くてたまらん。」

明日香を背負い、歩き始めた。

「んー（何でじょひ、魁吏さんが明日香さんを背負った瞬間胸がもやもやしました・・・）」

そして、外に出たあたりで明日香が眼を覚ました

「うーうーは・・・」

「 ゆつやく、起きたか。」

明日香は自分が背負われている事に気づき

「 か、魁吏！…なんで、貴方が…？」

「 お前や、少しば仲間を頼れよ。ほりよ。」

魁吏は写真を明日香に渡した

「 ！」、これは…？」「これ…？」

「 廃寮の中に合つたんだよ。やつぱり、お前の兄さんの写真だった
か。」

「 ええ、兄さんは天を10と書いてたのよ。ありがとう、これだ
けでも見つかってよかったですわ。」

「 さて、眠いから早く送つて帰るか。」

第十話 VS十代 魂の融合サンスター（前編）

つっこ、制裁テコノル前までやつてしましました。少しづつストックが無くなつきました・・・

こつまで、Jのペース保てるか不安です。

第十話 ＶＳ十代 属性融合モンスター

廃寮事件から数日が経つた朝随分ひどい起しそれ方をされていた
ドンドン……！

「うせーなあ。なんだよ、人が気持よく寝ている時によ……！」

「早く、開ける……開けなければドア」と爆破するぞ……！」

朝からすげ物騒な事をドアの向こうから言っている。

「なんだ、てめえらは。」

魁吏はドアを開け、騒いでいた奴らを睨んだら隊長らしき女が

「我々はアカデミア論理委員会だ！如月魁吏、貴様には廃寮不法侵入の疑いで捕縛させてもらう。大人しく我々と一緒に来てもらおう。

「

女が手を上げた瞬間、数人の男が魁吏を掴もつとした瞬間

「俺に気安く触るな、屑ども。」

掴もつとした男たちの溝を的確に殴り倒した。

「き、貴様！反抗する気か！」

「うぬせえ、一緒にに行つてやる。だが、俺には触れんじゃね。今

度は、溝じやすまねえぞ。」

そして、魁吏は校長室に連行された。

「「退学……。」

「君たちへは、侵入禁止とされている旧ブルー寮に侵入したの～ネ。これは、重大な校則違反なの～ネ。」

「（ち、何時聞いてもムカつく話し方だぜ。）確かに、我々は旧ブルー寮に侵入しました。しかし、それだけで退学といつのは酷すぎませんか。」

「そりだぜ、校長先生。俺達にチャンスをくれよ、お願ひだ！」

「僕もお願ひします。」

二人が頭を下げた後洪々、魁吏も頭を下げた。

「クロノス教諭、確かにいきなり退学は酷すぎないかね。何かしらチャンスを上げても良いんじゃないのかね。」

「む～ん、ならデュエルで決めるの～ネ。もし、貴方達が勝つたら退学は無しで10枚の反省文許すの～ネ。負けたら退学、制裁タツグデュエルなの～ネ。」

「デュエルで決めるのか、面白いじゃんか！受けて立つぜ、なあ、翔！魁吏！」

「ちょ、ちょっと待ってほしいっす。タッグって言つても僕たちは

三人しかいないつすよ。それは、どうするんスか？」

「その一人は俺がやるから大丈夫だ、翔。」

「か、魁吏君。一人で、二人と戦うなんて・・・」

「その心配はありません、ならシングル戦も用意すればいい事なの、ネ。君達は他人の心配しないで自分の心配でもしてるの、ネ。」

「ほら、翔。クロノス教諭もこいつ言っているんだ、部屋に戻つて対策でも練ろうぜ。」

「わ、分かったッす。」

魁吏達は真つすぐ魁吏の部屋に向かつた。

「『めんなさい、私のせいで貴方達がこんな事になつてしまつて。』

明日香は頭を下げて謝つてきた

「魁吏さん、一人で戦うつて聞いたんですが大丈夫なんですか？」

美里もどうやら、騒ぎを聞き部屋までやつてきていた

「俺は、元より一人で戦つた方が合つているし下手に組んだらバランスが崩れるしな。それと明日香。気にするな、最終的にあそこに行つたのは俺達の意思なんだからお前が気にする事じやないよ。それより、俺はともかく十代と翔のデッキを改良する必要があるな。」

「俺達の『テック』をか？」

十代は、あぶらを搔きながら魁吏の方を見た。

「ああ、制裁『ヒュエル』だからな。どんな相手が来るか分かったもんじゃない。だから、少しでもお前達の『テック』を改良する。ビーグロイドはともかくE・HEROについては俺も『テック』を持っているから少なからず分かる。」

「えつー、魁吏、お前もHERO『テック』を持つて居るのか！」

「ああ、お前のとは融合モンスター や 戦術が少し違つがな。よし、十代表に出で。」

「なんでだ？」

「今から、お前に渡すカードを実戦で覚え込ませる。翔は、『ヒュエル』を見て対策を考えながら『テック』の構築だ。いいな。」

「は、はいっす。よろしくお願ひします。」

そして、ラーメンロード少し離れた林の中

「『ヒュエル』！」

魁吏 L.P 4000

十代 L.P 4000

「そういえば、魁吏と戦うのってこれが初めてじゃないか。」

「ああそつだな。全く、こんな風にデュエルしたくはなかつたが仕方ないか。先攻は俺がもうつー。」

「ああ、来い！魁吏！」

「俺のターン！俺は、E・HEROヒーローハーマンを召喚、召喚時効果によりデッキからE・HEROオーシャンを手札に加えカードを一枚伏せターンエンド！」

魁吏 場

モンスター E・HEROヒーローハーマン AKT1800

魔法・罠

伏せカード一枚

「見た事のない、HEROだな。でも、こっちも負けてられないぜ！俺のターン、ドロー！」

十代は手札を見た瞬間笑った。

「（おい、その笑い顔はなんだ・・・）」

「俺は、手札から融合を発動！手札のフェザーハーマンとバーストレーナイを融合、現れるE・HEROフレイム・ウイングマン！」

「でも、それは読んでいた！リバースカード発動、奈落の落とし穴！攻撃力1500以上のモンスターを破壊し除外する！」

「げつ！させるか、速効魔法 融合解除を発動し素材のモンスター

を特殊召喚する。来い、フュザーマンとバーストレーティー！

十代 場

モンスター E・HEROフレイム・ウイングマン E・HERO
フュザーマン AKT1000

E・HEROバーストレーティー AKT1200

「全く、こきなり融合とかいつ見てもあり得ない引きだな。おい。

「魁吏、安心するのは早いんじやないか。俺はまだ、通常召喚をしてないぜ」

「…………おい、まさか」

「一体のモンスターを生贊に来い、E・HEROヒッジマン。」

十代 場

モンスター E・HEROヒッジマン AKT2600

「ふざけんなあ……なんだ、その引きせーー。」

「行くぜ、ヒッジマンでヒアーマンを攻撃！パワー・ヒッジ・アタック」

「へへん。」

ヒッジマンの攻撃によつヒアーマンは破壊された。

魁吏 L P 4 0 0 0 3 2 0 0

「俺は、カードを一枚伏せてターンエンド！」

十代
場

モンスター E・HEROエッジマン AKT2600

魔法 · 罢

伏せカーボン一枚

「す、すごい。まだ、始まつたばかりなのに・・・」

「魁吏の眼にひとたび反応しちゃうと、上級モンスターを呼び出すなんですね！」二わね。

「魁吏さん・・・」

三人は序盤から相手の読みあいをする一人に啞然としていた。

「くそ、フレイム・ウイングマンを上手く回避できたと詫ひたらこのいつかよ。仕方ね、さつとこいつを倒すか。」

「な！攻撃力2600のモンスターを倒すですって、モンスターも無いのにどうやって！？」

「俺のターン、ドロー！俺は、エヴォルテクター シュバリエを攻撃表示で召喚！」

魁吏 場

モンスター エヴォルテクター シュバリエ AKT1900

「HEROじゃないんだな。でも、攻撃力1900で攻撃力2600のエッジマンをどう倒す！」

「いやるんだよ、リバースカードオープン、デュアルスパーク！
こいつは自分フィールドに存在するレベル4のデュアルモンスターを一体生贊にフィールドのカード一枚破壊する。その後、デッキから一枚ドローする。俺は、エッジマンを選択！」

電撃を纏つたシユバリがエッジマンに体当たりし破壊した。

「エッジマン！こんな、簡単に破壊されるなんて・・・」

「俺は、デュアルスパークの効果で一枚ドロー。さらに、魔法カード融合を発動！」

「！？来たか、魁吏のHEROが！」

「俺は、手札の沼地の魔神王とE・HEROオーシャンを融合！氷の世界から現れる、E・HERO アブソルートZERO！」

魁吏 場

モンスター E・HERO アブソルートZERO AKT2500

「おお、見た事のないHEROだ！」

十代も見た事のないHEROを見てテンションも上がりきっている

「JJJJは、ZEROと水属性の属性融合モンスターの一體だ！」

「JJJ属性融合ーー？」

「セレ、ZEROは水その他にも火、風、闇、光、地の計6つの属性融合モンスターがZEROには存在する。」

「なんて、モンスター達なの・・・」

「どう言つ事つすか？」

翔は、明日香が言つた意味が分かつていな様子で美里が

「翔さん、つまり十代さんがいつも使つてているフレイム・ウイングマンの素材のフェザーマンとバーストレディはそれぞれ風属性と火属性なのにフェザーマンを属性の素材にすれば風属性の融合モンスターにバーストレディを属性の素材にすれば火属性の融合モンスターになるというわけです。しかも、属性に任せずにそのまま融合してフレイム・ウイングマンにする事も可能なんです。」

美里の丁寧で分かりやすい説明を聞いた翔は

「なら、状況によつて融合先を変更出来るつてことじやないつか

！」

ようやく、この強力を気に気づいたようだ。

「強力だな、属性融合モンスター。ぐ～他のモンスターも早く見てみたいぜ！」

「おい、そんな悠長な事を言つてはいる場合か？俺は、アブソルートZEROで十代にダイレクトアタック！瞬間氷結！」

「まだ、ライフを削られるつまりはないぜ！リバースカードオープ、攻撃の無力化！」

「防いだか・・・俺はターンエンドだ。」

魁吏 場

モンスター E・HERO アブソルートZERO AKT2500

魔法・罠

伏せカード1枚

「へへへ、俺のターン、ドロー！俺は手札からバブルマンを召喚、効果により一枚ドローする！」

「（こいつ、まじでチーとじやないのか！？しかも、バブルマンはアニメ効果だし・・・なんでOCGだと弱体化したんだろ。）」

「俺は、魔法カード融合回収を発動しバーストレディと融合を手札

に加えるとして、融合を発動し手札のE・HEROクレイマンとバーストレイディを融合！来い、E・HEROランパートガンナー！」

十代の場に盾を持つた女性型モンスターが現れた。

十代 場

モンスター E・HERO ランパートガンナー DEF2500
E・HERO バブルマン DEF 800

「おい、何にも居なかつたはずなのに何で此処まで場が固まっている・・・」

「さあ、なんでだろうな。とにかく、俺はランパートガンナーの効果発動、攻撃力を半分にしダイレクトアタックが出来る！ランパートショット！」

「ぐあああああ！」

魁吏 LP3200 2200

「俺は、ターンエンドだ！」

「（こ）のままじゃ、まずいな。）俺のターン、ドロー！俺、融合回収を発動し融合とオーシャンを手札に加える。そして、俺はE・HERO フォレストマンを守備表示召喚。」

魁吏 場

モンスター E・HERO アブソルートZERO AKT2500

「せ、り、ヒ、融合を発動！俺はフィールドのZEROと手札のオーシヤンを融合しZEROを融合召喚！」

皆、なぜZEROを融合しZEROを召喚したか不思議に思った。

「なあ、なんだわざわざZEROを素材にしたんだ？それなら、フォレストマンでも良かったのに。」

十代最中の疑問を魁吏にぶつけ、魁吏は含み笑いながら

「それは、ZEROの効果を発動するためだ！ZEROの効果発動、このモンスターがフィールドを離れた時、相手フィールドのモンスターを全て破壊する！くらえ、疑似サンダー・ボルト…！」

「な、なんだと…」

十代の場にいたランパート・ガンナーとバブルマンは体の表面化凍つた瞬間粉々に砕け散った。

「なんて、効果なの…フィールドを離れただけで相手モンスターを破壊するなんて」

「これじゃあ、あのモンスターを破壊した瞬間巻き込まれて破壊されじゃないですか！」

「それだけじゃない。今みたいに自分で行為にフィールドを離れさせれば相手に場を0にしてダイレクトアタックが可能になる。」

「行くぜ、十代！アブソルートZEROでダイレクトアタック、瞬間氷結！」

「うひいいいい、さみい！」

十代 L P 4 0 0 0 1 5 0 0

「俺は、一枚カードを伏せてターンエンド。」

魁吏 場

モンスター E・HERO アブソルートZERO AKT2500
E・HERO フオレストマン DEF 2000

魔法・罠

伏せカード2枚

「俺のターン、ドロー！来たぜ、永続魔法 命削りの宝札を発動するぜ！デッキから五枚ドローし五ターン後手札を捨てる。」

「（こいつ、主人公の中でも一番の引きをしてないか？しかも、引いたカードの中に多分・・・）」

「俺は、魔法カード強欲な壺を発動しさうに一枚ドロー！そして、戦士の生還を発動、墓地からフェザーマンを回収し融合を発動する。手札のフェザーマンとバーストレディを融合し現れろ、フレイムウイングマン！」

十代 場

モンスター E・HEROフレイム・ウイングマン AKT2100

「また、こいつか……なら、手札には。」

「さあ、HEROの戦いにふさわしい舞台に行こうぜ、魁吏！ フィールド魔法、魔天楼 スカイスクレイパーを発動！」

場 魔天楼 スカイスクレイパー

「やつぱり引いていたか！」

「これで止めだ！ バトル、フレイム・ウイングマンでE・HERO アブソルートZEROを攻撃、フレイムショート！」

「悪いが、お断りだ！ リバースカードオープン、速効魔法 マスクド・チエンジ！ こいつは、自分フィールドにいるE・HEROをM・HEROに変身させる！」

「「「「M・HERO！？」」「」」

「俺は、ZEROを変身させる。来い、M・HERO グレイバー！」

「！」

魁吏 場

モンスター M・HERO グレイバー AKT2400

「へ、でも攻撃力はZEROの方が高かつたな。どっちにしろ、これで終わりだ！」

「・・・・・十代、忘れたか？ZEROのモンスター効果を。」

「あーーーしまった、これもフィールドを離れた事にーーー」

「そういう事だ！ZEROの効果再び発動、疑似サンダー・ボルト！」

「く、俺はまだ通常召喚を行つていない。俺は、フレンド・ドックを守備表示で召喚しカードを2枚セットしターンエンダ。」

十代
場

モンスター フレンドック DEF 1200

伏せカード2枚

「俺のターン、ドロー――！」で、フォレストマンの効果を発動、墓地又はデッキから融合を手札に加える。俺はデッキから融合を手札に加える。」

「へゝ融合回収モンスターか、毎ターン融合が手札に戻つてくるのはいいな。」

「俺は、今加えた融合を発動し、フィールドのフォレストマンと手札の炎属性、エヴォルテクター シュバリエを融合！」

「炎属性！来るか、一体目の属性融合モンスター！」

「燃え上がり、全てを灰にしろ！融合召喚、E・HERO ノヴァ・マスター！」

魁吏 場

モンスター M・HERO ヴェイパー AKT 2400
E・HERO ノヴァ・マスター AKT 2600

「あれが、二体目の属性融合モンスター炎のノヴァ・マスターなのね。」

「全体が燃えているつす。どんな、効果を持つてるんすかね。」

「これで、水と炎・・・やっぱり、順応性が高いモンスター達ですね。」

「ええ、相手はどっちの属性で融合するかを考えて戦略を練らなくてはいけないからかなり、厄介なモンスターね。」

「くつかつこいいぜ！炎の戦士、ノヴァ・マスター、どんな能力を持つているんだ！」

「行くぞ、十代！ノヴァ・マスターでフレンドックを攻撃。フレイム・メテオ！」

ノヴァ・マスターが放った炎の箭がフレンドックに直撃し破壊した。

「その瞬間、ノヴァ・マスターの効果発動！このモンスターが相手モンスターを破壊した時、テックから一枚ドローする。」

「ドロー効果モンスターか、相手を破壊するたびにドローし手札を増強か・・・」

「ただでさえ、融合は手札の消費が激しいからな。ドロー効果はかなり、使えるぜ。」

「でも、俺もフレンドツクの効果を発動！墓地からE・HEROと融合を手札に加える。俺は、墓地からバブルマンを手札に加える。」

「M・HERO ヴェイパーでダイレクトアタックだ、フリアティクエクスプロージョン！」

「させないぜ、リバースカードオープン！聖なるバリア ミラーフオース、攻撃モンスターを全て破壊するぜ！」

「それはどうかな、ヴァイパーの効果は魔法・罠・効果モンスターの効果では破壊されない！破壊されるのはノヴァ・マスターだけだ、すまないノヴァ・・・攻撃続行！」

「うわああああ

十代 L.P 1500 - 900

「く～負けた。今度は勝つからな、魁吏！」

倒れた十代に手を差し出し立たせる魁吏

「なあ、なんでノヴァの攻撃時に聖バリをはつびさせなかつたんだ？発動すればまだ、生き残れたのに」

「ああ、それは」

十代が手札を見せてきた

「な！」

そう十代の手札にはミラクル・フェージョンとスパークマンが握られていた。もし、このターンでケリを着けていなかつたらミラクル・フェージョンでフレイム・ウイングマンそして回収した融合でスパークマンと融合しシャイニング・フレイムウイングマンになつた。

「あぶね～ギリギリだつたぜ・・・」

「でも、結果的には負けちまつたけどな」

「さてと、十代。これで、分かつたと思うがお前に渡すのはオーシャン、フォレストマン、エアーマン、そして属性融合モンスターを渡す。これらと、今お前が持つE・HEROを混ぜて変幻自在のデッキにする。翔は、ロイド・デッキの内容をもう一度確認し直す、タツグデュエルなんだ。一人だけ強くても意味はないからな。」

「わ、分かつたす。兄貴の足手まいにならなにように頑張るっす！」

翔は、手を握り直し意気込みを入れると翔の肩を叩きながら

「その通りだ、翔。お互に頑張りやせー。」

「よし、一回部屋に戻つて調整だー明日香と美里も手伝ってくれ。三沢、お前の知識には期待しているぜ。」

「いいわよ。」

「分かりました。」

「おう、分からぬ事があつたら言つてくれ。元壁に仕上げて見せる。」

おまけ

部屋に戻りテックの調節をしていたら十代が机の上にある一つのテックケースに気が付いた。

「魁吏、これはなんだ?」

「ああ・・・・・これは、俺の持つテックの一軍だ。」

「「「「」一軍!?」」」」

すると、三沢は

「となると、今度の制裁デュエルでは」のデッキで出るのか？」

魁吏は、少し困った表情しながら机の上にあつたデッキを手に取つた。

「いや、このデッキでは出ない。」

「な、なんでだ？」このデッキは一軍なのだが、ならなんでこのデッキを使わないんだ！？」

「やつすよ、今度のデュエルで勝たなきゃ退学になるんですよ。」

「このデッキは少しばかり癖のあるデッキでな、それとこいつは相手を徹底的に叩き潰す為のデッキなんだ。だから、今回は使わない。・・・まあ、いつも持ち歩いてはいるがな。」

「やうなんだ、残念だなーお前の一軍と戦つてみたかったな。」

「まあ、機会があつたらな・・・」

魁吏は、手に取つたデッキケースを引き出しの中に閉まつた。

その様子を見ていた、美里は

「（魁吏さんのあのデッキは一体何なのでしょう？）様子が今まで違いましたし今まで使つていたデッキとは何か違うような雰囲気が・・・」

第十話　VS十代 属性融合モンスター（後編）

制裁デュエルは三回位に分けると思います。では、お楽しみに

第十一話▽Sカイザー（前書き）

カイザーとのデュエル篇です。かなり、難しかつたです・・・

第十一話 VS カイザー

「翔、ビニだ！！！」

十代のデッキを直し、翔のデッキを許可したは良いがいざ実戦を行うとビニしてもフレミスを連発してしまい原作通り翔は逃げ出してしまった。

「翔！ー！てめー、デッキを強化の強化は終わってるんだから後は練習あるのみなんだから出てきやがれ！ー！」

「魁吏さん、それだと逆に出てきませんよ。」

額に怒りマークを作った魁吏に美里は冷静に突っ込んだ。

「でも、何処にいるのかしら？翔君は。」

「後は、海岸を探してみるか。もし、逃げる前だったら飛び蹴りをかまして逃げられなくしてやる。」

足を振り回しながら、準備をする魁吏に十代は

「おい、魁吏。デコエルが待ってるんだからビニビニな。」

「こや、ほびほびでもだめだから（ですーー）」「

「アニキ、じめん。僕こはやつぱり無理つす・・・れよなー。」

翔はいかだのオールを漕ぎ始めた瞬間

「誰の断わりを貰つて逃げよ!とことじゆくじや、ボケ!…」

「へーーー！」

魁吏は、まるで某連金の戦士のような蹴りでいかだを叩き割った。

「さやあああああ！」

「翔、大丈夫か！魁吏、少しほ手加減位しろよ。」

「なに、わざのキックは・・・まるで流星みたいだった。」

「びつやつたら、あんな直角に落ちる事が出来るんですか。」

陸をみると走つて追いついた十代達が居た。

「翔！お前、デッキが少しくらい上手く回せなくてプレミスを連発したくらいで逃げるとはどういつ事だ！…まともに練習しなくちや、回る事を出来ないしプレミスもするだろ!がーーー！」

「魁吏君・・・でも、僕がびつやつたつて上手く出来るわけがないし、アーキの足を引っ張るよ。それなら、僕より魁吏君の方が・・・

「

翔の言葉を聞いた魁吏は翔の胸倉を掴んだ。

「ふざけんな！…前にも言つたが、俺はタッグデュエルをする気はないしそれ用のデッキも持つてはいない！お前が、逃げ出したら自動的に十代は退学が決定してしまうんだぞ！…」

「でも、僕なんかじゃ・・・」

「情けないな、翔。」

魁吏が翔をどなつていると後ろから声が聞こえた。

「お、お兄さん。」

岩陰から出でたのは翔の兄貴ことカイザー亮だった。

「リヒで、去るか。それも、良いだろ?」

「お、お兄さん・・・」

カイザーは翔に背中を見せ歩いてこいつとするが。

「ちょい待ち、カイザー。」

魁吏はカイザーを呼びとめた。

「なんだ、如月魁吏。」

「お前、実の弟に何にも言わないつもりか。」

「それも、仕方がない事だ。」

「てめー。なら、俺とテュエルをしる。」

魁吏は腕に付けていたデュエルティスクを胸の前に掲げた。

「何? どいつもこいつもだ。」

「お前が、翔に何にも言わないなら俺が翔に伝えてやる。だが、今このことに言葉を通じない。なら、『デュエルをして教えてるんだよ。』

「

「魁吏君・・・」

「良いだろ?、如月魁吏。お前とは一度戦つてみたいと思っていた所だ。」

カイザーも同じように『デュエル』ディスクを掲げた。

「行くぞ!...」

「『デュエル!...』」

「先攻は、俺がもらうぞ。ドロー、俺はスクラップビーストを攻撃表示で召喚し、カードを一枚伏せターンエンド!」

魁吏 場

モンスター スクラップ・ビースト A.K.T 1600

伏せカード一枚

手札三枚

「俺のターン、融合を発動! 手札のサイバードラゴン一枚を融合し来い、サイバーツインドラゴン!...」

「ちつ、こきなりツインかよ。(でも、エンドよりはマシか。)」

「バトル、サイバーツインでスクラップ・ビーストを攻撃！！」

「おつと、悪いがそれはさせないぜ。リバースカードオープン、月の書。ツインは裏側にしてもらうぜ。」

魁吏が発動した月の書によつてツインは裏側になつた。

「かわしたか、ならサイバーフェニックスを守備表示で召喚し一枚カードを伏せターンエンド。」

「エンドフェイズ時にスクラップ・スコールを発動。効果によりフィールドのスクラップを一体選択し、その後デッキから一枚ドローする。そして、選択したスクラップを破壊する。その瞬間、スクラップ・ビーストの効果を発動！このカードがスクラップと名の付いたカードによつて破壊された時に墓地からこのカード以外のスクラップと名の付いたモンスターを手札に加える、俺はスクラップ・キマイラを手札に加える。」

「スクラップ・スコールの時に落としたモンスターか。」

カイザー 場

モンスター 伏せモンスター 一枚

サイバー・フェニックス DEF1600

伏せカード一枚

手札一枚

「俺のターン、ドロー。俺は、ワンフォーワンを発動し手札からレ

ベルスティーラを墓地に送りデッキから黄泉ガエルを特殊召喚する。そして、黄泉ガエルを生贊にスクラップ・ゴーレムを召喚。効果を発動し来い、スクラップ・ビースト！」

「なるほど、蘇生効果を持つモンスターか。」

「ああ、こいつには一ターンに一度墓地に存在するレベル四以下のスクラップを自分または相手の場に特殊召喚する事が出来る。行くぞ、レベル五のスクラップ・ゴーレムにレベル4のスクラップ・ビーストをチューニング！今ここに、破棄された龍がその力を振るうために起動する！シンクロ召喚、スクラップ・ツイン・ドラゴン！」

「来たか、シンクロ召喚。」

「あの、ドラゴンは！？」

「万丈目君を倒した時に使ったカード！」

「墓地からベルスティーラの効果を発動！スクラップ・ツイン・ドラゴンのレベルを一下げ墓地からベルスティーラを特殊召喚しスクラップ・ツイン。ドラゴンの効果を発動！俺は、ベルスティーラを破壊しカイザーのサイバー・フェニックスと伏せカードを手札に戻す！」

「なら、チエーンシリバースカードオープン。サンダーブレイク、サイバー・フェニックスを捨てスクラップ・ツイン・ドラゴンを破壊させてもらひ。」

天から落ちた雷がスクラップ・ツイン・ドラゴンを貫いた。

「すげー、お互いに初っ端から飛ばしてるぜ。」「

「ええ、攻撃を防いでシンクロ回喰をしたと思つたらそれを破壊。どちらも負けていないわ。」

明日香達の言葉に美里は

「でも、あのモンスターは破壊するのはまずかつたですね。」

美里の言葉に翔は不思議に思い

「それは、どういった事つすか?」

「カイザー。ツイン・ドラゴンを破壊されるのは少しひくらした
が、少しばかり焦ったな。」

「何?」

「スクラップ・ツイン・ドラゴンの効果を発動!このカードが相手
によつて破壊された時墓地からスクラップと名の付いたモンスター
を特殊召喚する。来い、スクラップ・ゴーレム!」

魁吏の場にもう一度冷蔵庫のようなモンスターが現れた。

「なんだとー?」

「なんだ、あのモンスター。反則くせー」

「破壊された時と同じ事は、自滅しても特殊召喚出来るらしいね。強力な効果ね。」

「前に見せてもらつたんですが、スクラップのドラゴン族のシンクロモンスターはみんなあの能力を持つていました。」

「魁吏君、すいじゅつ。」

「俺は、もう一度ゴーレムの効果を使い現れるスクラップ・ビースト…そして、ゴーレムのレベルの一下げてレベルステイーラを特殊召喚する。」

「何をする気だ。さつきのモンスターは一体で出したが、わざわざレベルを下げるモンスターを特殊召喚するとは」

「今度は違うシンクロモンスターだ、レベル四となつたスクラップ・ゴーレムとレベル一のレベルステイーラにレベル四のスクラップ・ビーストをチューンングー！凍てつく氷を吐きし古の龍が今解き放

たれる、シンクロ召喚！…現れる、氷結界の龍 トリシュー・ラ…！」

魁吏の前に三つの頭を氷の龍が召喚された。

「これを、召喚するためにレベルを下げるのか。」

「まあな、こいつの効果はかなり強力だぜ。」

魁吏は、笑いながらカイザーを見た。

「強力な効果とは？」

「この能力だ！」これがシンクロ召喚に成功した時に相手の場、墓地、手札から一枚ずつ除外する事が出来る！」

「　　なあ……？？？」

「何という効果だ……？」

「俺は、場のセットモンスター、墓地からサイバードラゴン、手札は一枚しか無いかからそれを除外する。」

「ぐつ……」

「そして、ダイレクトアタック！「キュートスプレス！」

「ぐあああーー！」

「俺は、ターンヒンドだ」

魁吏 場

モンスター 氷結界の龍 トリシユーラAKT2700

手札 二枚

「俺のターン、ドロー。ふつ、俺は魔法カード天よりの宝札を発動！お互いに手札が六枚になるまでドローする。」

「な！（おいおい、）こで天よりの宝札って何だよ。しかも、アーメ版の効果だし……」

「俺は、死者蘇生を発動しサイバードラゴンを特殊召喚し、プロト・サイバードラゴンを召喚する。このカードはフィールドに表示され、存在する時名前をサイバードラゴンとして扱う事が出来る。そして、融合を発動！場のサイバードラゴンとプロト・サイバードラゴン、そして手札のサイバードラゴンを融合し現れる、サイバーエンデドラゴン！」

「出やがったな、カイザーの代名詞モンスター！」

「ついに、出てきたわね。亮の最強のモンスター。」

「すげ～、かっこいいモンスターだなあ！」

「お兄さん、すげ～。」

三人がサイバー エンドドラゴンに驚いていたが美里だけは魁史を見て

「あれが、カイザー最強のモンスター……魁史さん。」

「バトルだ！！エターナル・エヴァオリューション・バースト！」

サイバー・エンドから放たれたビームがトリショーラを包み込んで破壊された。

魁吏 L P 40000 2700

「俺は、一枚カードを伏せてターンエンドだ。」

カイザー場

モンド等 サイバー・エンジニアリング
AKTACO

手札
0

「くそ、戦況を一変させられた。どうする、さつきのターンで手札は六枚まで増えたが手札にサイバーエンドドラゴンを倒すカードは手札に無い・・・チューナーはあるがスクラップゴブリンだしな。出したら、貫通効果で負ける。とにかくドローしてから考えるか。

魁吏は考えた末にドローした。

「これは……よし、これならいい。俺は魔法カード簡易融合を「P-1000」を支払い発動する、この効果によりレアファイッシュを使特殊召喚する。」

魁吏の場に獅子と魚が融合したモンスターが現れた。

魁吏「P2700 1700

「なぜ、あのようなモンスターを1000も支払ってまで」

「理由は、これだ!! 手札から、スクラップ・ゴブリンを召喚し、レベル4のレアファイッシュにレベル3のスクラップ・ゴブリンをチューニング! 氷で作られし槍がこの世の全てを貫き碎く。シンクロ召喚、現れる氷結界の龍 グングニール!!」

魁吏の前に全体を氷で覆われ、禍々しさを持つた龍が現れた。

「氷結界の龍 グングニール。さつきのトリシュー・ラと同じ系統のモンスターか。」

「その通りだ。しかし、こいつは他の奴らと違つて出しづらいんだ。」

「

「出しづらい、それはどう言つ事だ?」

「こいつは、チューナーと水属性のモンスターでなければ召喚する事が出来ないんだ。だから、水属性であるレアファイッシュを使ったつていうわけだ。」

「なるほど。それほどの手順を踏んだんだ、能力はそれなりの効果なんだろ。」

「ああ、見せてやるぜ。俺は、グングニールの効果を発動！グングニールは一ターンに一度手札を一枚まで捨て相手フィールドのカードを破壊する事が出来る。俺は、手札を一枚捨てサイバーエンドドラゴンと伏せカードを破壊する、凍りつけ！」

「ぐつ……」

「すげー、カイザーのサイバーエンドドラゴンを破壊し絶望的な戦況をさらにひっくり返した……」

「なんて力なの、氷結界の龍達は」

「あんなモンスターを変幻自在に扱えるなんてすげー。」

「お兄さんの、モンスターを悉く破壊していくなんてすげーです。魁史君。」

「カイザーにダイレクトアタックだ！エターナル・フリーズ！」

「悪いが、それは通すわけにはいかない。リバースカードオープン、攻撃の無力化。」

グングニールが放った氷の槍はカイザーの前に現れた渦に飲み込まれ消えた。

「くつ、これでも通らないのか。俺はターンエンド。」

魁吏 場
モンスター 氷結界の龍 グングニールAKT2500
手札 三枚

「行くぞ。俺のターン、ドロー！俺は、命削りの宝札を発動し、プロト・サイバードラゴンを召喚し貪欲な壺を発動。墓地からサイバードラゴン一枚、サイバー・フェニックス、サイバー・エンド・ドラゴン、サイバー・ツイン・ドラゴンの五枚をデッキに戻し一枚ドローアする。」

「（おい、最初手札0だったのに。今じゃ手札が五枚ってなんだよ。チートにも程があるだろ！）」

「俺は、魔法カードパワー・ボンドを発動！手札のサイバードラゴン一枚と場のプロト・サイバードラゴンを融合、出でよサイバー・エンド・ドラゴン！！」

「ついに出たか、攻撃力8000のサイバー・エンド・ドラゴン…
・・」

「行くぞ、魁吏。」これで止めだ、エターナル・エヴォリューション・バースト!!

サイバー・エンドから放たれた三つの光線は一つになりグングニールに襲う。

「くそおおおおおおおお!!!!!!」

魁吏 LP1700 - 6300

「おい、魁吏!! 大丈夫か! ?」

「ああ、くそおー負けた!! 最後の最後で巻き返された!!」

「でも、すごいわよ。亮相手に此処まで喰いかかったのは貴方が初めてよ。」

「そうです。すごいです、何度も何度も立ち向かっていくなんて感動しました!!」

十代達が魁吏の周りを囲んでいるとカイザーが近寄ってきた。

「如月魁吏、久々に面白いデュエルが出来た。礼を言おう。」

カイザーは手を魁吏に向け伸ばし、魁吏は手を取った。

「ああ、こっちも良い経験が出来た。ありがとう。」

カイザーは翔の方を少し見て立ち去った。

「魁吏君」

魁吏に翔が近寄った。

「翔、その顔だと何かを掴んだみたいだな。」

「うん、逃げるだけじゃなくて立ち向かっていく事も大切なんだ
っていう事が良く分かつたッス。」

第十一話▽Sカイザー（後書き）

どうだったでしょうか？カイザーのチートドローを書くのは本当に大変でした。かなり、無理やりなことをしましたが。次回はついに制裁デュエル編です。

第十一話 制裁デュエル 前篇▽S十代、翔（前書き）

制裁デュエルが始まります。三つくらいに分ける予定です。では、十代＆翔篇です。

第十一話 制裁デュエル 前篇VS十代、翔

「おい、それは本当なんだろ？」「

「本当デース。私は、シンクロやエクシーズ召喚などは知りません。」

「そうか、こっちも奴の事を調べてみたが素性が全くといって足が掴めなかつた。だが、アカデミアの筆記試験にも受けられそして、実施試験ではシンクロ召喚という新たな召喚方法で見事、最高責任者を倒し入学を決めた。」

「そうですか、遊戯ボーイにも聞いてみましたが知らないと言つてしまシタ。一体、彼は一体何者何でショウガ？」

「それを、確認するために行くのだろうが。それに、アカデミアにあいつが向かつたという情報も届いている。あいつが何故、アカデミアに行つたのかは知らんがあいつが絡むと悪い事しか起こらん。」

「そうですね。三邪神事件でイレイザーを使い消息が途絶えましたが、こんな所で見つかるとは思いませんデシタ。早く、捕まえないと大変な事になりマース。」

二つの影が乗つたヘリがアカデミアに向かつた、そして一人が言つていたあいつとは誰の事なんだろうか・・・・。

「デッキの改造から一週間ついに、制裁デュエルの日がやつてきた。その間に翔が逃げ出したり、カイザーとデュエルしたりと色々と大変だった……その後、連れ戻し翔のデッキも改良し練習も行い

「ついに、この日が来たな。」

魁吏は一戦目なので明日香達と共に観客席で様子を見ている。

「そうね。所で、貴方は大丈夫なの?」

「ああ、デッキは仕上げてきたし。今は、十代達を応援するぜ。」

「魁吏さん、今日は一体どんなデッキを使うのですか?」

美里は、魁吏を見ながら聞いた。

「ああ、今回はシンクロが主軸のデッキだよ。」

「あら、今までのデッキもシンクロが主軸じゃなかつた?」

明田香も話に加わり、魁吏に聞いた。

「今までのデッキとは違く、シンクロの召喚スピードに特化したデッキなんだ。見たら、びっくりするぜ。」

魁吏は、笑いながら明日香達を見た。

「お前は、色んなデッキを使うから対策が取りづらいな……」

三沢も、デッキの内容を聞いて少し疲れたように言った

「はははははは。お、始まるみたいだぜ。」

「では、今から制裁デュエルを始めるの～ネ。」

デュエルの順番はタッグを行つた後にシングル戦をやるので魁吏は後といふ事になる。

「そして、ドロップアウトボーイズのタッグデュエル対戦相手は、あのデュエルキング武藤遊戯と戦つたことのある伝説のデュエリストナの～ネ。」

そして、クロノスの声に反応しデュエル場に一つの影が、バク転しながら昇ってきて十代達の前に現れた。

「我ら流浪の番人。」

「迷宮兄弟。」

「お主達に恨みはないが…」

「故あり、対戦する。」

「我らを倒さねば・・・」

「道は開けん――！」

「「いや、勝負……！」」

「（毎回、見るたびに思うが）の一人が伝説のデュエルリストとは思えないな……なぜ、この一人を選んだらうか？まあ、初代でもともなタッグはこの一人だつたからかな。）」

「では、デュエルを開始するの～ネ。両者は指定の位置で準備するの～ネ。」

迷富兄弟と十代達はそれぞれ、デュエル場の端まで行きデュエルディスクを起動させた。

タッグデュエルルール

互いのプレイヤーに助言は禁止

パートナーのフィールドと墓地は自分のフィールド、墓地として扱える。

両チームのLP 8000

順番は 翔 迷 十代 宮

「では、デュエル開始なの～ネ！～」

「「「「デュエル！～！」」」

「僕のターン、ドロー。僕は、ジャイロイドを守備表示で召喚し一枚カードを伏せてターンエンド。」

翔 場

モンスター ジャイロイド DEF1000

伏せカード一枚

手札四枚

「私のターン、ドロー！私は、地雷蜘蛛を攻撃表示の召喚しターンエンド！」

迷 場

モンスター 地雷蜘蛛 AKT2200

手札 五枚

「俺のターン、ドロー！俺は、E·HERO スパークマンを攻撃表示で召喚、さらに一枚カードを2枚伏せてターンエンド！」

十代 場

モンスター スパークマン AKT1600

伏せカード一枚

手札 三枚

「私のターン、ドロー。私は、カイザー・シーホースを召喚し魔法カード、生け贋人形を発動する。自分の場のモンスター1体を生贋にする事で手札からレベル7のモンスターを特殊召喚する。私は兄弟の場の地雷蜘蛛を生贋に手札から風魔神・ヒューガを特殊召喚。」

「馬鹿な、一ターン目から攻撃力2400だとー!?」

「やるわね。これほど、スマーズにモンスターを召喚するなんて。」

「十代さん達は大丈夫でしょうか、魁吏さん?」

「まあ、始まつたばかりだ。大丈夫だろう。（しかし、風魔神か。懐かしい、本当に懐かしい。俺がガキの時だつただろうか？今では、滅多に見る事が出来ないカードだ・・・。）」

魁吏は風魔神を見て少しばかり懐かしさを味わっていた。

「すまむな、兄者よ。」

「いいや、お前のためになら犠牲にでもなるつ。」

「だが、それでは私の気が済まない。私は兄者を対象に魔法カード、闇の使者を発動。このカードはカード一枚選択しそれが、デッキに入つていれば相手は手札に加える。私は、雷魔神 サンガを選択する。」

「ふふふ、有りがたい。私のデッキには雷魔神 サンガは入つている。よつて、手札に加える。」

迷は手札に雷魔神 サンガを加えた。

「私は、これでターンエンドだ。」

宮 場

モンスター カイザー・シー・ホース AKT1700

風魔神 ヒューガ AKT2400

手札三枚

「僕のターン、ドロー！スチームロイドを召喚する。そして、ジャイロイドを攻撃表示に変更。（どうする。どっちを攻撃するべきだ。生贊人形でファイールドが開いた兄を攻撃するべきか、それとも、次のターン出でくるだろ？雷魔神サンガのためにカイザーシー・ホースを破壊しておくべきか……）よし！スチームロイドでカイザーシー・ホースを攻撃！」

蒸気を出しながらスチームロイドは、カイザーシー・ホースに体当たりするが

「させん！風魔神ヒューガの効果を発動し攻撃を一度だけ0にする。

ヒューガが出した風の壁によって、スチームロイドははじかれた。

「届かない……でもこれは、無効には出来ない！ジャイロイドで兄にダイレクトアタック！」

「ぐあ！」

「やつたぜー翔、伝説のデュエリストから先手を取つたぜー。」

「やつたす、アーチキ。僕は、メインフェイズ2に融合を発動しスマートロイドとジャイロイドを融合！来い、スマートジャイロイド！さらに、一枚カードを伏せてターンエンド。」

翔 場

モンスター スチームジャイロイド AKT2200

伏せカード一枚

手札一枚

「よし、十代達が先手を取つた！」

「翔君が先手を取るとは思つてなかつたけど、すごいわ！」

「すごい、このまま行けば勝てる。」

「翔！このまま、押ししきれ！（アニメだと初手で融合してダメージが通らなかつたが、これでいい。でも・・・次のターンにはあいつが出てくるんだろうな。元の世界でも実戦で見た事がないあのモンスターが）」

「よくもやつたな。私のターン、ドロー！私は、死者蘇生で地雷蜘蛛を復活させ魔法カード生贊人形を発動する。この効果により手札から水魔神スーガを特殊召喚！弟よ、今度はお前の力を借りるぞー！」

「ああ、兄者よ。」

「私は、カイザーシーホースを生贊に雷魔神サンガを召喚！カイザーシーホースは光属性の生贊にする時一体で一体分とする事が出来る。」

そして、迷宮兄弟の場には雷魔神サンガ、風魔神ヒューガ、水魔神スーガが揃つた。

「そんな、一気に上級モンスターが三体も・・・」

「まだ、終わりではない。私は、雷魔神サンガと風魔神ヒューガ、そして水魔神スーガを生贊に出でよ。最強のモンスター、ゲート・ガーディアン！！」

「ゲート・・・」

「ガーディアン・・・」

「ゲート・ガーディアン・・・」

「そんな、攻撃力3750だなんて・・・」

「あんなモンスターが出てきたら十代さん達は・・・」

「（おいおい、ついに出やがった。ゲート・ガーディアン、実戦で召喚したの初めて見たぜ。でも、ガーディアンにするよりも三体で攻撃した方がいいのになんで、こっちではやたら合体したがるんだ？）」

「私は、ゲート・ガーディアンでスチームジャイロイドを攻撃！魔神衝撃波！」

「ぐああああああーーー！」

ゲート・ガーディアンから放たれた攻撃がスチームジャイロイドに直撃し破壊された。

十代・翔 LP8000 6450

「私はこれで、ターンエンドだ。」

迷場

モンスター ゲート・ガーディアン AKT3750

手札一枚

「俺のターン、ドロー！俺は、融合を発動し手札のバーストレディと場のスパークマンを融合！」

「その素材で召喚出来るHEROはいるわけが！」

「来い、炎のHERO ノヴァマスター！」

十代の場に炎を纏つたHEROが現れた。

「バ、バカな！？なぜ、その素材でそのようなHEROが呼べる…」

「へへへへへ、こいつは炎属性のモンスターとHEROと名のつくモンスターが素材で呼び出せるHEROだ！さらば、エアーマンを召喚するぜ！召喚時効果によってデッキからHEROを手札に加える、俺はE・HEROオーシャンを手札に加え融合を発動！来い、風のHERO Great Tornado…」

「ふん、たかが攻撃力2800で何ができる。」

「それはどうかな、Great Tornadoの効果発動！召喚時に相手フィールドに存在するモンスターの攻撃力、守備力を半分にする！」

「「な、何だと！？」

「ぐらえ、ダウンバースト！」

ゲート・ガーディアン A K T 3 7 5 0 1 8 7 5

「バトル！ノヴァマスターで攻撃、メテオ・フレイム！」

ノヴァマスターから放たれた炎がゲート・ガーディアンを包み込み破壊した。

迷宮兄弟 L P 7 0 0 0 6 0 7 5

「ば、バカな！こんな簡単に、私達の最強モンスター」

「ゲート・ガーディアンが破壊される等！？」

十代がゲート・ガーディアンを破壊した瞬間声援がわいた。

「おお！…すごいぞ、十代！」

「まさか、一ターンでゲート・ガーディアンを破壊するなんて…」

「

「あれが、風の HERO Great Tornadoですか。なんて強力な効果なんでしょう。」

「はあ～渡しておいてなんだけど属性融合モンスターと十代のチートドローが合わさったら最強なんじゃね？普通、手札四枚でノヴァとGreat Tornadoをどひつかりも出すか、普通…」

「アニギー！」

「おう、やつたぜ！俺は、ノヴァマスターの効果を発動する。こいつは相手モンスターを破壊した時、デッキから一枚ドローする。そして、Great Tornadoでダイレクトアタック！スーパーセル！」

「「ぐあああああーーーーー」

迷富兄弟 L P 6 0 7 5 3 2 7 5

「俺は、ターンエンドだ！」

十代 場

モンスター E・HEROノヴァマスター AKT2600
E・HERO Great Tornado AKT

2800

手札一枚

「く、私のターン、ドロー！ゲート・ガーディアンを倒した事は褒めてやるufs。だが、ゲート・ガーディアンを破壊した事は失敗だつたな。魔法カードダーク・エレメントを発動！このカードは墓地にゲート・ガーディアンが存在するときに発動でき、ライフを半分支払う事でデッキから闇の守護神・ダーク・ガーディアンを特殊召喚する！出でよ、ダーク・ガーディアン！」

フィールドに出来た穴からダーク・ガーディアンが召喚された。

迷富兄弟 L P 3 2 7 5 1 6 3 8

「攻撃力3800だと！？」

「そんな、せつかくゲート・ガーディアンを倒したのに」

「バトル、ダーク・ガーディアンよ小僧にダイレクトアタック！ダーケシヨックウェーブ！」

「翔！！」

「大丈夫っす！リバースカードオープン、エネミーコントローラー！一つの効果によつてダーク・ガーディアンを守備にするつす！」

フィールドに現れたコントローラーがダーク・ガーディアンに繋がり守備表示に変更した。

「ぐ、私はターンエンドだ。」

宮 場

モンスター ダーク・ガーディアン DEF3500

手札一枚

「僕のターン、ドロー！ぐ、手札にあいつを倒せるカードがない。僕は、パトロイドを守備表示で召喚しターンエンド。」

翔 場

モンスター パトロイド DEF1200

「私のターン、ドロー！ダーク・ガーディアンを攻撃表示変更し、バトル！ノヴァマスターを破壊しろ。ダークショックウェーブ！」

「ぐつ！！！」

十代・翔 LP6450 5550

「私はターンエンドだ。」

迷場

モンスター ダーク・ガーディアン AKT3700
手札三枚

「俺のターン、ドロー！俺は、手札から融合回収を発動、墓地から融合とスパークマンを手札に加え融合を発動！手札に加えた、スペークマンとフェザーマンで融合、来い光のHERO Theシャイニングを召喚しGreat Tornadoを守備変更しターンエンドだ。」

十代 場

モンスター E・HERO Great Tornado DEF
2200

手札0

「もはや、打つ手なしと見える。なら、さらに絶望を『えよう。私のターンドロー！手札から装備魔法カードメテオ・ストライクを発動！装備モンスターは貫通能力を与える。やれ、ダーク・ガーディアンよE・HERO Great Tornadoを攻撃、ダークショックウェーブ！」

ダーク・ガーディアンから放たれた攻撃の余波が十代達を襲った。

「ぐあああああ！！！」

十代・翔 LP5550 4050

「ターンエンドだ。さあ、どうする。サレンダーするなら今のうちだぞ。」

「アニキ・・・

「翔！諦めるな、まだ勝負は終わってない！」

翔は、観客席にいるカイザーを見て覚悟を決める。

「・・・・うん！（お兄さん、僕は諦めない！！）僕のターン、ドロー！来た！僕は、手札から魔法カードパワー・ボンドを発動！手札のユーフォロイドとアニキの場のE・HERO Theシャイニングを融合、ユーフォロイド・ファイターを融合召喚！」

ユーフォロイド・ファイター AKT ???

「ばかだ、攻撃力が決まっていない！？」

「ユーフォロイド・ファイターの攻撃力と守備力は素材にしたモンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる！素材になつたのは攻撃力1200のユーフォロイドと攻撃力2600のE・HERO Theシャイニングだ、よつて攻撃力は3800になる！」

ユーフォロイド・ファイター AKT 3800

「だ、ダーク・ガーディアンと攻撃力が並んだ！？だが、ダーク・ガーディアンは戦闘では破壊されない！」

「まだだ！パワー・ボンドの効果発動、このカードで融合召喚されたモンスターは攻撃力は二倍となる！」

ユーフォロイド・ファイター AKT 3800 7600

「攻撃力7600だと！？」

「行くよ、アーキー！」

「おう、翔！！」

「「くらえ、ネオ・オプティカル・トルネード!!」」

ユーフォロイド・ファイターから放たれた攻撃がダーク・ガーディアンを包み込んだ。

「ば、バカなあ～伝説のデュエリストが負けるなん～テ・・・・
「やつたぜ！翔！！

「アーチ、僕たち勝てたんだね！！」

「ああ、俺達勝つたんだー。よしじゃー。」

「まさか、あそこから、逆転するなんてな。」

「ええ、十代と翔君の一人の勝利ね。」

「す、」かつたです。」

「ああ、どうなるかと思つたぜ。（ユーフォロイド・ファイターフ融合素材によつて上に乗るモンスター変わるのか？面白いな。）さて、次は俺の番か。」

魁吏は静かに席から立ち上がつた。

「魁吏、頑張つてこいよ。お前が居なくなつたらせつかくの研究が無駄になつてしまつ。」

「貴方とはまたデュエルしたいから勝ちなさいよ。」

「魁吏さん、頑張つてください！――」

三沢、明日香、美里が魁吏に言い

「まかせな、俺もこんな所で負けるつもりは無い！」

魁吏はデュエル場に降りつて行つた。

第十一話 制裁デュエル 前篇▽S十代、翔（後書き）

どうだったでしょうか？やっぱり、このタッグデュエルはパワー・ボンドで止め！－しかないとthoughtたのでこうしました。次回は、魁吏がデュエルします。対戦相手はまさかの相手です。Rを見てない誰だ？と思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8089w/>

遊戯王g × 転生者の介入録

2011年11月20日01時14分発行